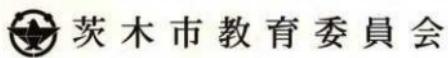


大阪府茨木市

平成16年度発掘調査概報

平成17年3月





東奈良遺跡 第3面 調査区全景（西から）



東奈良遺跡 第3面 SD-601・SD-502B 土層断面（西から）
本文 1 P～



西部南側西区 石室検出状況（南東から）



第1西部南側西区 石室周辺埴輪列南群（南西から）
耳原遺跡 本文40P～

はじめに

日本の古代を考える言葉に、銅鐸文化圏と銅矛・銅戈圏というのがあり西日本の東西に分布しているのはよく知られたことであります。しかし、数年前に島根県神庭荒神谷遺跡で大量の銅剣・銅矛が、また、加茂岩倉遺跡で大量に埋められた銅鐸が出土したのはご存じのことと思います。

さらに、佐賀県の吉野ヶ里遺跡で小銅鐸や鳥栖市の安永田遺跡からは銅鐸の鋳型が発見されるなど、九州からも小ぶりとはいえ銅鐸の姿が見られ、上記の文化圏の色分けや時代の後先・伝搬の由来については、必ずしも明らかではありません。

わたしたちのまち茨木市も、東奈良遺跡から出土した銅鐸の鋳型や小銅鐸が発見されるなど銅鐸文化圏に属していたと考えられます。また、その鋳型と同范の銅鐸が豊岡市氣比3号銅鐸、豊中市原田神社銅鐸、香川県普通寺市我拝師山銅鐸で見られるのも興味のあるところであります。

その他全国の銅鐸にも一部「兄弟」関係があることも判明しており、この時代を画する出来事の一つと考えられますが、なぜかその後銅鐸については一切歴史の記述からは姿を消してしまいます。

これらの地中の遺物が出土されたのは、開発事業に伴う発掘調査によるものであることはいうまでもありません。古代の歴史を考えるうえでこれらの貴重な遺物を残し継承していくことは、大切なことと考えています。

この冊子は、平成16年度に行った発掘調査についてその概略について述べたものです。調査にあたって、惜しみのないご協力をいただきましたご関係の皆様に深く感謝するとともに、今後とも本市の埋蔵文化財の保存・保護により一層の温いご理解とお力添えを賜りますようお願い申しあげます。

平成17年3月31日

茨木市教育委員会
教育長 大橋忠雄

目 次

はじめに

例 言

茨木市内遺跡分布図

平成16年度埋文化財発掘調査一覧表

1. 東奈良遺跡（東奈良三丁目125・126）	1
2. 東奈良遺跡（東奈良三丁目114・115）	23
3. 東奈良遺跡（東奈良三丁目127）	27
4. 耳原遺跡（耳原三丁目地内）	40
5. 牟礼東遺跡（寺田町21他）	51
6. 東奈良遺跡（天王二丁目211-1）	54
7. 総持寺遺跡（三島丘一丁目261-1他）	57
8. 耳原遺跡（耳原三丁目地内）	71
9. 東奈良遺跡（東奈良三丁目111）	74
10. 宿久庄遺跡（藤の里二丁目455-2他）	81
11. 春日遺跡（春日三丁目120）	83

1. この概報は、茨木市教育委員会が平成16年度に実施した発掘調査事業報告です。
2. 本書に使用した地図は「茨木市地域計画図-1／2,500」です。

平成16年度 埋蔵文化財発掘調査の概要

1. 平成16年度発掘調査

茨木市における平成16年度の発掘件数は11件で、埋蔵文化財確認試掘・立会調査件数は229件ありました。発掘調査原因の事業別件数は、民間事業10件、公共事業1件です。公共事業は、コミュニティセンターの建設で、民間事業では共同住宅建設工事や宅地造成工事などでした。

発掘調査件数は前年とほぼ同数で、確認試掘・立会調査件数もほぼ同数です。社員寮の売却や民間工場研究所などの民間企業の土地の売却が進み、交通の利便性や公共施設の充実等からか大規模な共同住宅の開発が顕著にみられ、北部丘陵の彩都も入居が始まっています。

2. 平成16年度発掘調査における主要な調査の概要

平成16年度において茨木市教育委員会が実施した発掘調査の中で、注目される調査は東奈良遺跡の調査があげられます。

東奈良遺跡は、昭和48年から翌年にかけて銅鐸を鋳造していた鋳型やふいごの羽口等が出土し、平成11年には東奈良土地区画整理事業に伴い、都市計画道路と区画道路部分の発掘調査により舌のついた朝鮮半島系とみられる小銅鐸が溝底から出土しました。この調査は平成12年までの長期に渡って実施され、報告書「東奈良一東奈良土地区画整理事業に伴う発掘調査概要報告一」が刊行されました。

平成14年から道路以外の換地に民間の開発がはじまり、共同住宅や保育所・老人福祉施設などが計画され、平成16年も共同住宅建設工事に伴う発掘調査が実施されました。

この概報にその一端を記載していますが、今後の調査も見込まれ、この東奈良遺跡の環濠集落としての全体像が明らかにされるものと考えられます。

耳原遺跡の調査では、丘陵地の西端部分で横穴式石室が新たに発見されました。小規模ではありますが側壁石が石室内に落ち込んでいて天井石はなくなっています。

石室内から金製冠やガラス小玉等が検出され、耳原西古墳と名付け、耳原古墳・鼻摺古墳と東西に並ぶ古墳群の様相が判明しました。

用語等

S B : 建物跡・掘立柱建物跡

S E : 井戸

S X : 落込み・不定形土坑

S C : 柱列群

S K : 土坑

S D : 溝・雨落溝

S R : 流路

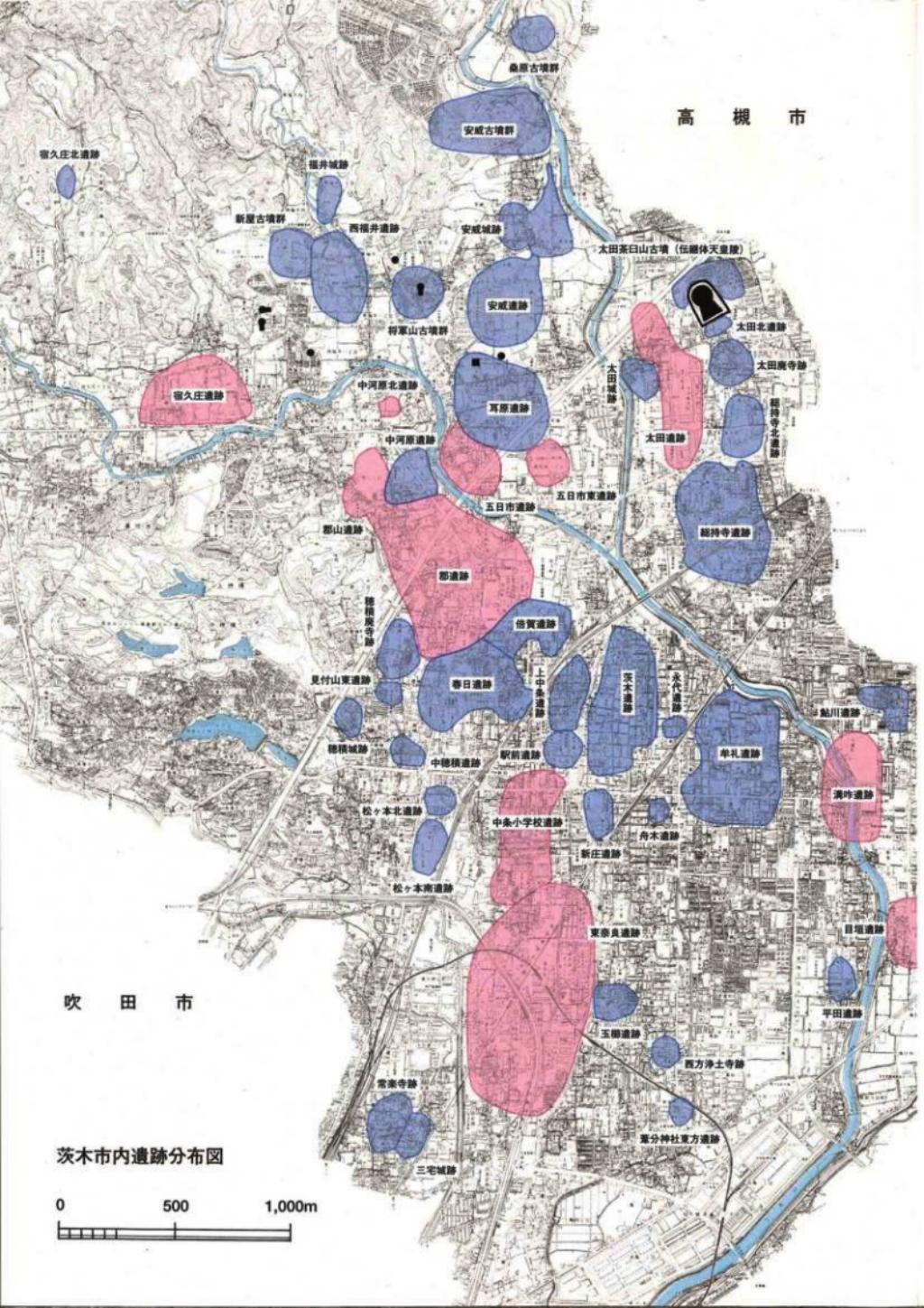
畿内第I・II・III・IV・V様式：畿内から出土する弥生土器を基準とした土器区分で、機種構成やプロポーション（土器の形態）で、およそ5つに分けられI様式が弥生時代前期、II～IV様式が弥生時代中期、V様式が弥生時代後期の年代観が与えられている。

庄内式併行期：豊中市庄内遺跡から出土した土器を基準とした時代区分で、およそ弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にあたる。

図版目次

第1図 東奈良遺跡環濠概略図	第37図 東奈良遺跡第I調査区 第III遺構面
第2図 ハ 第2遺構面平面図	第38図 ハ II I
第3図 ハ 3 ハ	第39図 ハ II II
第4図 ハ 調査区断面図	第40図 ハ II III
第5図 ハ S D502等断面図	第41図 ハ III I
第6図 ハ S D515等断面図	第42図 ハ III II
第7図 ハ 出土遺物（1）	第43図 ハ III III
第8図 ハ ハ（2）	第44図 耳原西古墳周辺遺跡分布図
第9図 ハ ハ（3）	第45図 耳原遺跡第1調査区地形測量図
第10図 ハ ハ（4）	第46図 ハ 第1・2調査区遺構平面図
第11図 ハ ハ（5）	第47図 耳原西古墳範囲図
第12図 ハ ハ（6）	第48図 ハ 石室実測図
第13図 ハ ハ（7）	第49図 ハ 出土円筒埴輪
第14図 ハ ハ（8）	第50図 ハ 石室玄室内出土 ガラス小玉・金製冠
第15図 ハ 遺物観察表（1）	第51図 半礼東遺跡遺構図
第16図 ハ ハ（2）	第52図 ハ 南から
第17図 ハ 第2・3遺構面全景	第53図 ハ 北から
第18図 ハ 遺構面・断面等	第54図 東奈良遺跡遺構平面図
第19図 東奈良遺跡南壁断面土層図	第55図 ハ 遺構検出状況
第20図 ハ 最終面平面図	第56図 総持寺遺跡周辺調査全体図
	第57図 ハ 北地区全体図
第21図 ハ 遺構面検出状況	第58図 ハ 南地区全体図
第22図 東奈良遺跡調査区配置図	第59図 ハ 出土遺物
第23図 ハ 第I調査区第I遺構面	第60図 ハ 調査区全景
第24図 ハ ハ II	第61図 ハ 調査区全景
第25図 ハ ハ III	第62図 耳原遺跡平面図
第26図 ハ 第II調査区第I遺構面	第63図 ハ 遺構面検出状況
第27図 ハ ハ II	第64図 東奈良遺跡遺構図
第28図 ハ ハ III	第65図 ハ 第1次調査第3遺構面
第29図 ハ 第III調査区第I遺構面	第66図 ハ 2 中央区
第30図 東奈良遺跡第III調査区第II遺構面	第67図 ハ 2
第31図 ハ ハ III	第68図 ハ 2方形周溝墓 溝IV
第32図 ハ 第I調査区第I遺構面	第69図 宿久庄遺跡遺構図
第33図 ハ ハ 南から	第70図 春日遺跡調査区配置図
第34図 ハ ハ II	第71図 ハ 遺構面検出状況
第35図 ハ ハ 南から	
第36図 ハ ハ III	

高槻市



0 500 1,000m
[Scale Bar]

平成16年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表

No	遺跡名	調査位置	調査期間	調査面積	調査内容	調査原因
1	東奈良遺跡	東奈良三丁目 125・126	15.11.12～16.1.29	496m ²	弥生時代 古墳時代 奈良時代 中世 近世 石器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 金屬器 木漆 骨角	共同住宅建設
2	東奈良遺跡	東奈良三丁目 114・115	16.3.23～16.6.9	532m ²	弥生時代 古墳時代 弥生 前期遷墳 弥生前期～中期、 古墳時代前期初頭の溝 土塁 落込み ピット 多数 弥生土器 土師器 木製品 動物遺体 石製品等	共同住宅建設
3	東奈良遺跡	東奈良三丁目 127	16.3.24～16.6.1	549m ²	弥生時代 古墳時代 溝 柱穴 弥生土器 土師器 須恵器	共同住宅建設
4	耳原遺跡	耳原三丁目地内	16.6.4～16.10.12	7,517m ²	古墳時代 飛鳥時代 円墳（後期古墳） 方墳？ 溝 柱穴 土塁 円筒埴輪 ガラス小片	宅地造成
5	牛込東遺跡	寺田町21他	16.5.21～16.5.27	106m ²	中世 溝 柱穴 土師器 瓦器	共同住宅建設
6	東奈良遺跡	天王二丁目 211-1	16.5.24～16.6.2	65m ²	弥生時代 中世 水田遺構？牛足跡 ガラス玉	共同住宅建設
7	総持寺遺跡	三島丘一丁目 261-1他	16.5.24～16.6.11	1,862m ²	古墳時代 戒鳥時代 奈良時代 平安時代 中世 古墳時代の堅穴住居 跡 6棟 飛鳥～奈良時代の 建物跡 中世の建物跡 柱列 墓坑 土師器 須恵器 陶磁器	宅地造成
8	耳原遺跡	耳原三丁目地内	16.7.21～16.8.24	525m ²	中世 土取痕 土坑 ピット 溝 風倒木 土師器 須恵器 陶磁器	給排水施設 移設
9	東奈良遺跡	東奈良三丁目 111	16.6.4～16.8.20	532m ²	弥生時代 古墳時代 土塁 溝 柱穴 弥生土器 上師器 須恵器	共同住宅建設
10	宿久庄遺跡	藤の里二丁目 455-2他	16.8.23～16.11.29	502m ²	中世 弥生土器 土師器	コミュニティ センター建設
11	春日遺跡	春日三丁目120	16.11.8～16.12.8	396m ²	弥生時代 古墳時代 中世 自然流路 溝 弥生土器 土師器 須恵器	共同住宅建設
12	春日遺跡	春日一丁目 85-1他	17.3.2～17.3.15	119m ²	古墳時代、飛鳥・奈良時代 平安時代、中世 土塁、溝、柱穴、耕作溝 石器、土師器、須恵器 陶磁器	共同住宅建設

No12についての報告は後日とします。

東奈良遺跡

所在地 茨木市東奈良三丁目125・126

調査原因 共同住宅建設事業

調査期間 平成15年11月12日～平成16年1月29日

調査面積 496m²

調査担当 黒須 靖之

調査結果

東奈良遺跡は茨木市南部の標高6～8mの沖積平野上に位置し、地形的に北西から南東方向に向かって緩やかな傾きを持っている。南北約1.2km、東西約1kmの遺跡範囲で弥生前期の複点的集落として周知されている。近年、東奈良土地区画整理事業に伴う区画道路部分の発掘調査が実施されてから、

この区画内の換地部分の調査が増加しており、今回の調査も換地区画内に共同住宅を建築するため事前に発掘調査を実施したものである。

今回の調査では主に古代～中世を主体とする面、弥生時代前期後半から古墳時代前期を主体とする面及び弥生時代前期を主体とする地山面の3面で遺構検出および精査を行った。

検出遺構

今回検出された主な遺構は以下のとおりである。古代～中世面では井戸や溝、土塙が検出された。調査区北及び西側では中世の南北方向の溝および条里制に伴うと思われる鈎溝を多数検出した。これらの耕作溝はN4°Eでやや東にふれるが、ほぼ東西南北を基調とし条里制区画を意識していることが窺える。次に弥生時代前期後半～古墳時代前期を主体とした面では、弥生時代後期～古墳時代初頭（庄内併行期）の円形周溝（SD522）、弥生時代中期の環濠（SD502）、井戸3基、土塙53基、溝約20条、柱穴約2,300口を精査している。また、弥生時代前期を主体とする地山面でも環濠2条（SD502-B・SD515-B）、井戸2基、土塙7基、溝約10条、柱穴約800口を精査している。

基本層序

調査区の基本層序は検出面のⅠ層からⅣ層まで大別される。Ⅰ層が表土で0.5～0.85mの現代の盛土及び耕作土である。Ⅰ層は灰黄褐色シルト質埴土を含み、層厚0.05～0.15mを測り古代～中世の遺物包含層である。Ⅰ層上面では古代～中世（第1面）の遺構検出を行っている。Ⅱ層は黒褐色土にぶい黄褐色シルトや褐灰色粘土ブロックを含み、層厚0.05～0.3mを測る。弥生時代後期～古墳時代前期の遺物包含層である。Ⅲ層は黒褐色土に暗褐色シルトと黄褐色粘土ブロックを含み、層厚0.15～0.25mを測り弥生時代中期の遺物包含層である。Ⅳ層は黒褐色土に黄橙色粘土を層状に含み、層厚0.05～0.15mを測り弥生時代前期後半～中期初頭の構築土（地業）である。こ



位置図

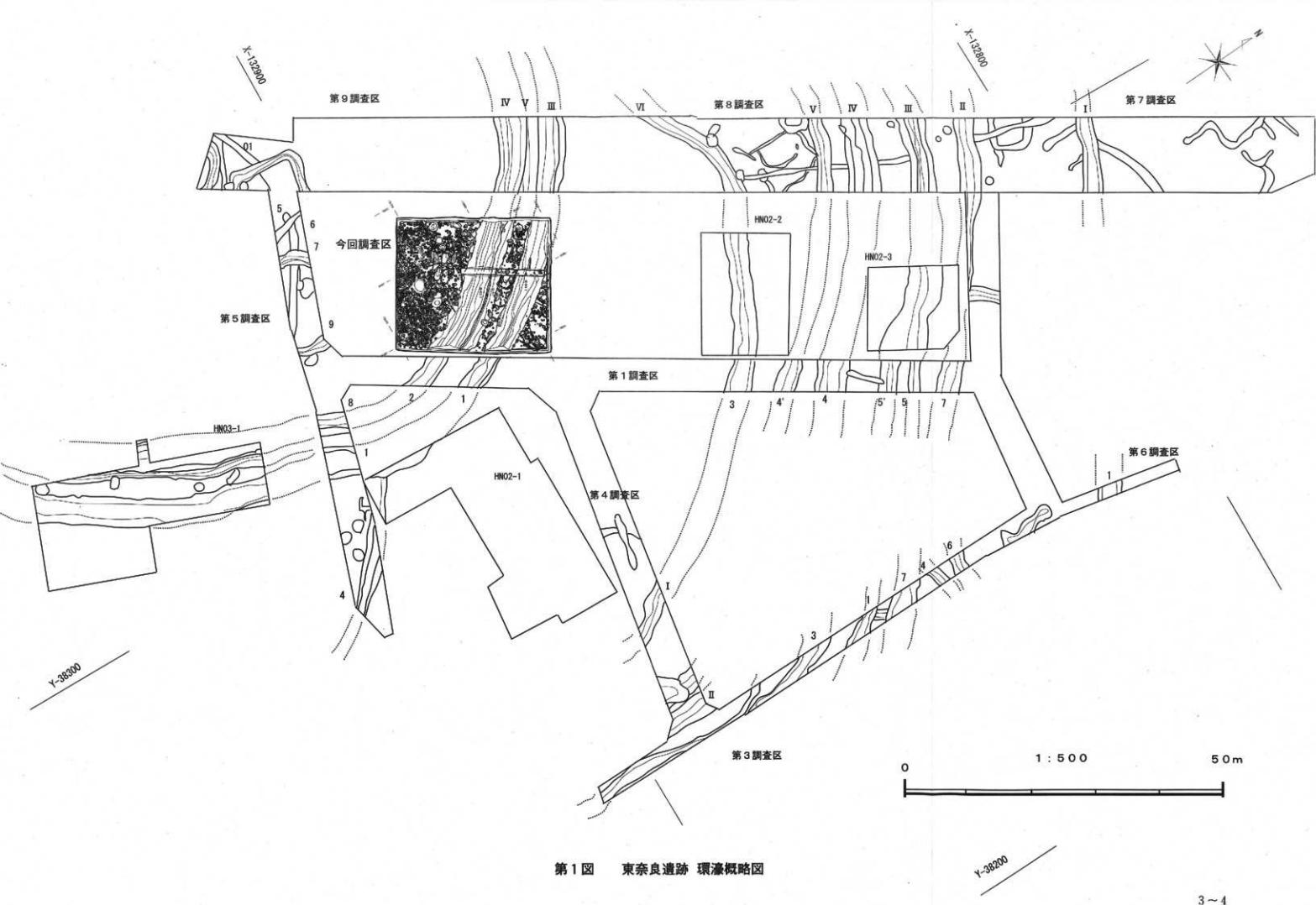
のⅣ層上面で弥生時代前期後半～古墳時代（第2面）の遺構検出を行っている。V層はにぶい黄褐色粘土に明黄褐色粘土を含み、層厚0.1～0.2mを測り弥生時代前期の遺物包含層である。VI層は明黄褐色粘土の地山でV層上面で弥生時代前期（第3面）の遺構検出を行っている。最終面の検出面の標高はおよそT.P.7m前後である。SD522はⅡ層下面、SD502・515はⅢ層下面、SD601はV層下面から掘り込まれている。

出土遺物

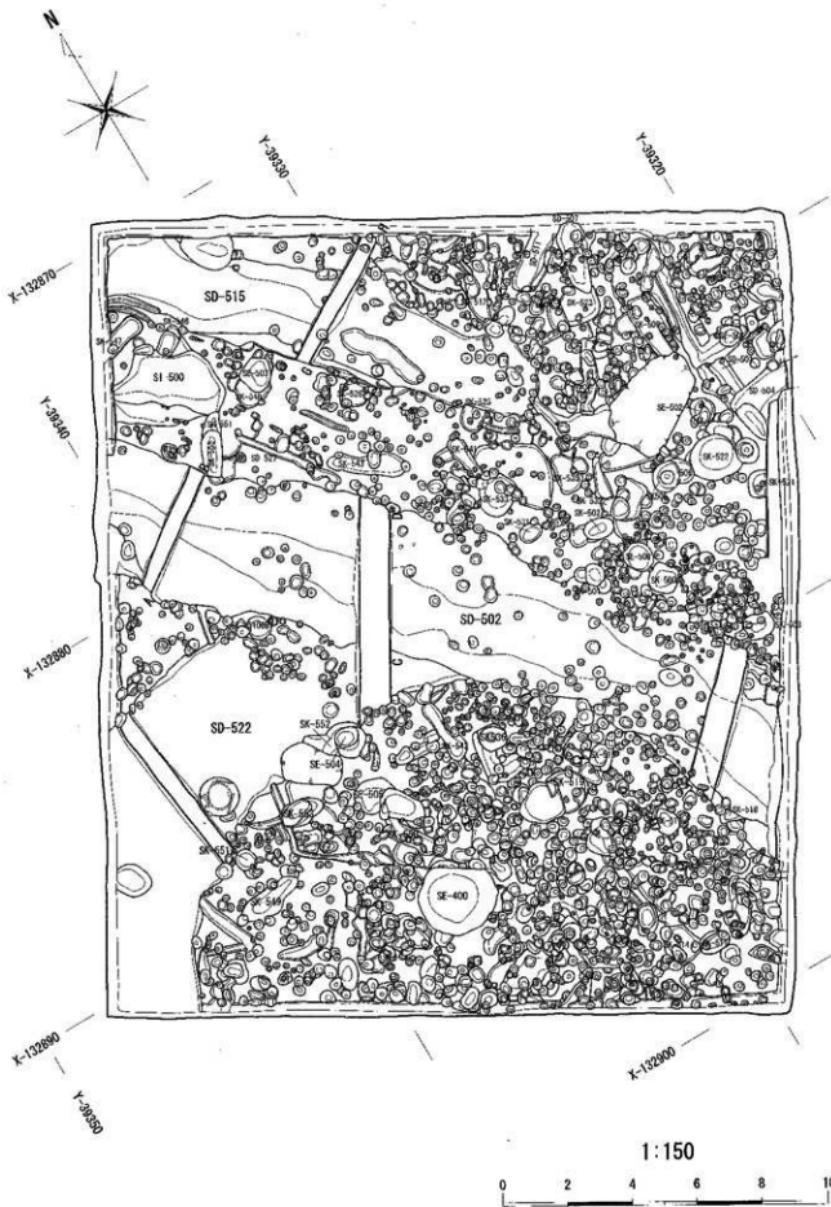
出土した遺物は遺物収納コンテナに換算して約675箱に及び、その種類と内訳は蓋・壺・甕・鉢、高杯・器台・水差し・ミニチュアなどの弥生土器や土製品、石鎌や石槍・石包丁・削器・磨製石斧・砥石・敲石・石皿などの石器類、獸骨を中心とした骨類、板材の木器、古墳時代～古代の土師器や須恵器、中世の上師皿や黒色土器碗・陶磁器類がある。これら多量の遺物のうち、実測可能なものは数百点を数えるが、今回の概報においては弥生時代前期の環壕と考えられるSD502B・515BやSD502Bに切られるSD601の土器群を中心に掲載した。出土した遺物量は合計5,500.2kgであった。その内、土器量は5,153.3kg、石器307.5kg、木器16.2kg、骨23.2kgを計る。上器量はm²当たり10.39kg/m²であった。周辺調査区（第1図）では02-1が土器量1,893kg、石器80.4kg、木器20.2kg、骨4.6kg、土器はm²当たり2.97kg/m²を計り、02-2では土器量1,398kg、石器13.6kg、土器量はm²当たり4.99kg/m²であった。環壕SD502・515の上器量を比較すると、SD502が1,400.1kg、13.86kg/m²、SD515が371.7kg、4.59kg/m²であった。出土した石器の内訳はチップ・フレーク（石器屑）11点、コア（石核）4点、スクレイパー（搔器削器）29点、ナイフ16点、石鎌8点、石錐1点、石ベラ14点、石槍8点、磨製石斧40点、石包丁52点、砥石（扁平短冊タイプ）27点、砥石44点、石皿1点、敲石4点、つぶて4点、その他19点となっており計282点を数え、砥石・石包丁・磨製石斧の多さが目立つ。掲載遺物の詳細は遺物観察表に記した。

環壕（第2・3図）

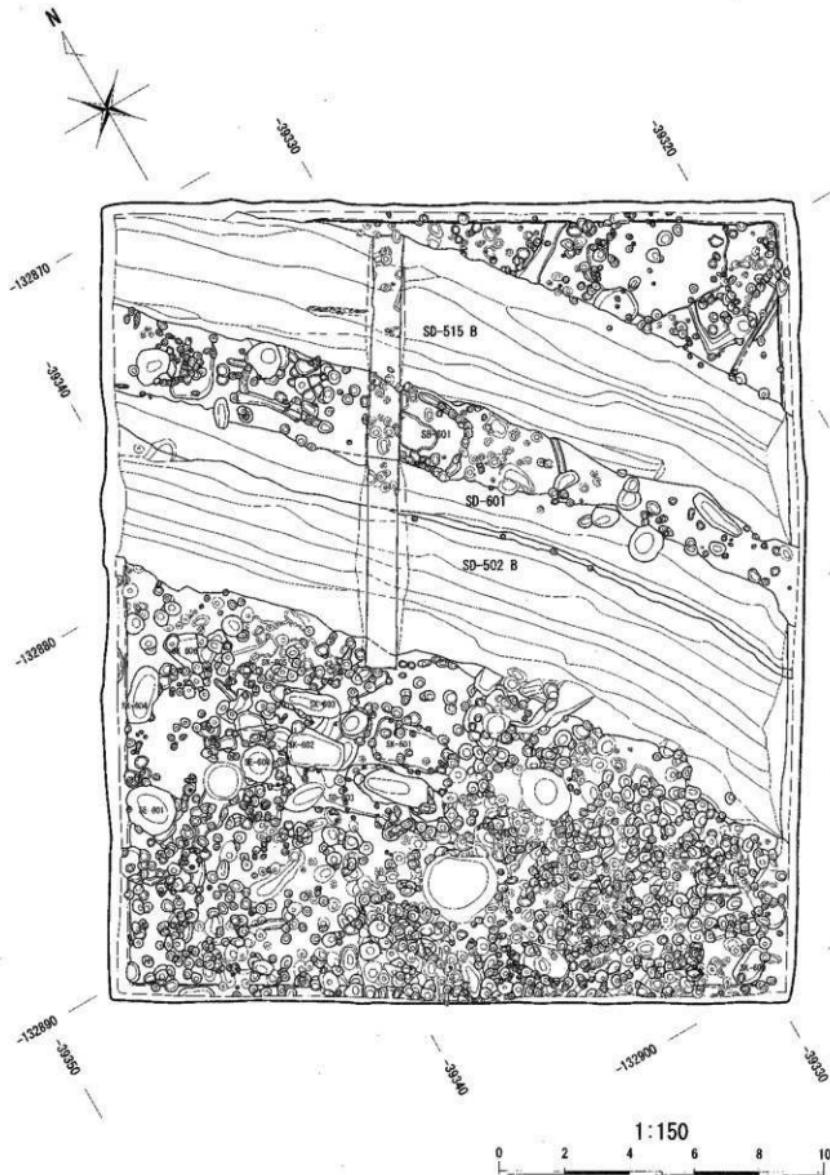
SD502は調査区のほぼ中央を北西～南東方向に通っており、長さは約22mを測る。上端3.5～4.6m、下端0.4～0.7m、深さは検出面から約1.3mで南東側がやや標高が低い。断面形は逆台形状を呈し、埋土は大きく分けて14層に大別されるが、A～C層までは弥生時代中期頃の溝の堆積と考えられる。H層は黄褐色・灰白色粘土ブロックを多量に含む層でSD515側にのみ見られる。SD515はSD502に2.3～3.8mの間隔をあけ並走しており、緩いカーブを描く外側に位置する。長さは約22mを測り、上端3.5～4.3m、下端0.4～0.6m、深さは検出面から約1.05～1.3mで断面形はU字状を呈する。埋土は大きく分けて16層に大別される。特にF～K層は人為堆積のブロック土と見られ、整地のために地業した可能性がある。SD601はSD502と515の間を並走しているが、SD502に切られており、その掘削時期は前期の中でも早い時期と考えられる。長さは約22mを測り、上端1.0～1.6m、下端0.3～0.9m、深さは検出面から約0.45～0.85mで断面形はU字状を呈する。埋土は大きく分けて4層に分かれ、Q2層では焼上がり層状に確認された。埋没過程でSD502のH層やL層に削られるような堆積状況が窺える。



第1図 東奈良遺跡 環濠概略図

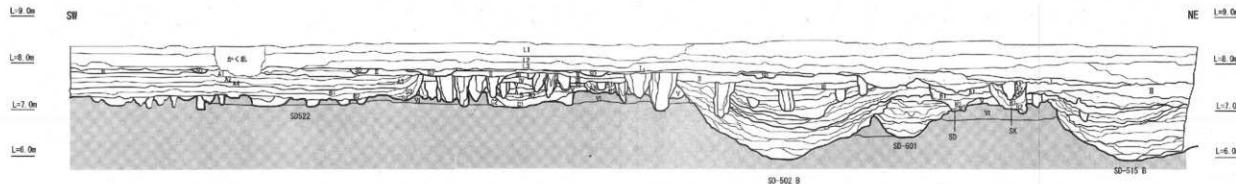


第2図 東奈良遺跡 第2造構面平面図

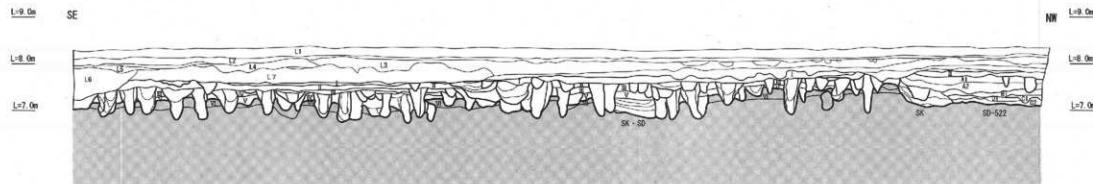


第3図 東奈良遺跡 第3構造平面図

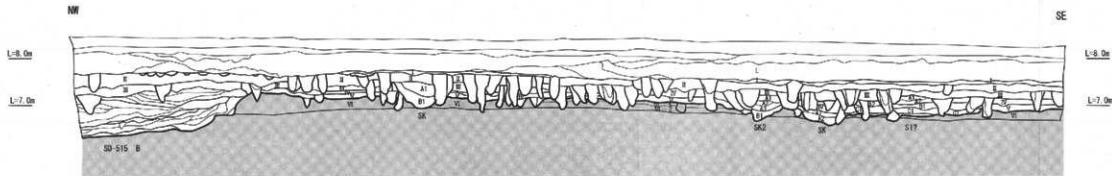
調査区西壁断面



調査区南壁断面



調査区東壁断面



基本層序

I層 S1110YR6/2, S1C7 SWR2/3 0.3~2cm大ブロック10~15% S1110YR6/1 粉 15~20% 硬、濃青 ~0.5cm大白色レギュ~中量含む。

II層 S1C10YR2/1, S1110YR4/2 粉 15~20% HC10YR6/1 0.5cm大ブロック 10~15% 中硬、青 ~0.5cm大白色レギュ~中量含む。0.3~1cm大白色化物少量含む。土器や砂多く含む。

III層 S1C10YR2/1, S1C10YR2/2 0.5cm大ブロック 10~15% HC10YR6/1 0.5cm大ブロック 10~15% 中硬、青 ~0.5cm大白色化物少量含む。土器や砂多く含む。

IV層 S1C10YR2/2, HC10YR8/8 1~2cm大ブロック 40~50% S115YR6/6 粉 ~0.5cm大 3~5% 硬、濃青 ~0.2cm大白色レギュ~12~30cm大白色少量含む。土器や砂多く含む。

V層 HC10YR4/3, HC10YR4/6 粉 ~0.3cm大 10~15% 中硬、濃青 ~1cm大白色化物及び ~0.3cm大白色化物少量含む。

VI層 HC10YR6/6, 6/8, HC10YR2/1 1~2cm大ブロック 10% 中硬、濃青 ~0.1cm大白色化物及び ~0.2cm大白色化物少量含む。

古代~中世包含層

寄生堆代後期~古墳時代遺物包含層 [灰黄褐色シルトに細略褐色シルト質埴土、灰青シルト]

[基岩土層に少い灰青色シルト、灰青色粘土ブロック]

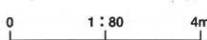
寄生堆代初期~古墳時代遺物包含層 [灰青色シルトに少い灰青色シルト、灰青色粘土ブロック]

[基岩土層に少い灰青色粘土]

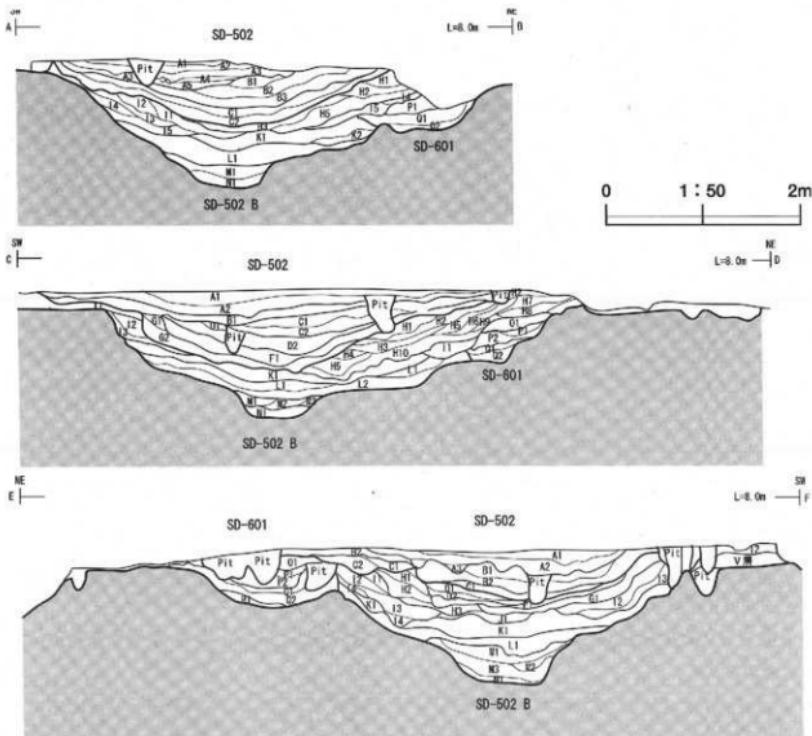
寄生堆代初期~中世初期遺物包含層 (地山堆積層)

[少い灰青色粘土に明黄色粘土]

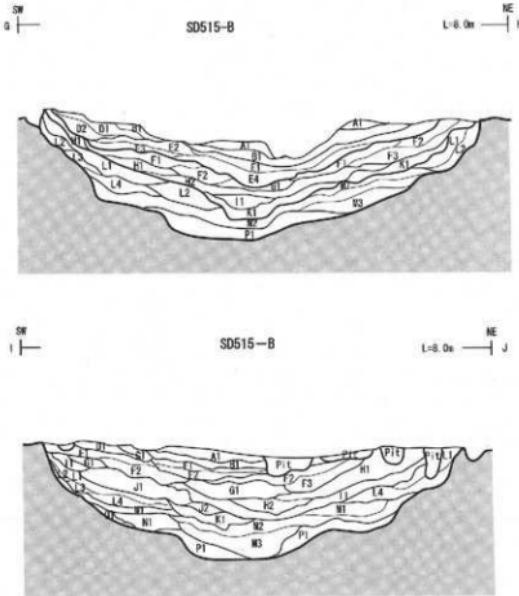
明黄色粘土に青色粘土ブロック]



第4図 東奈良遺跡 調査区 断面図



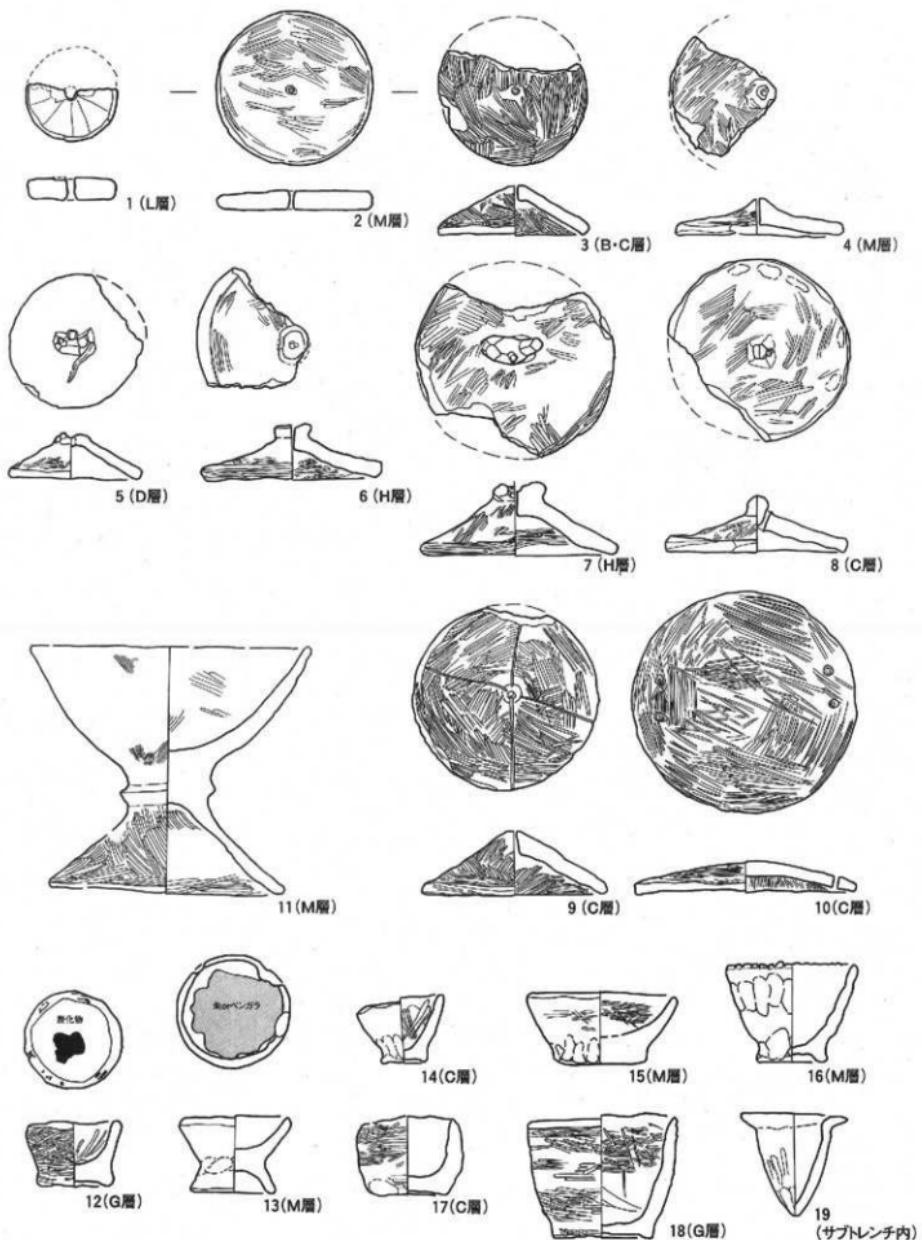
第5図 東奈良遺跡 SD502・SD502B・SD601断面図



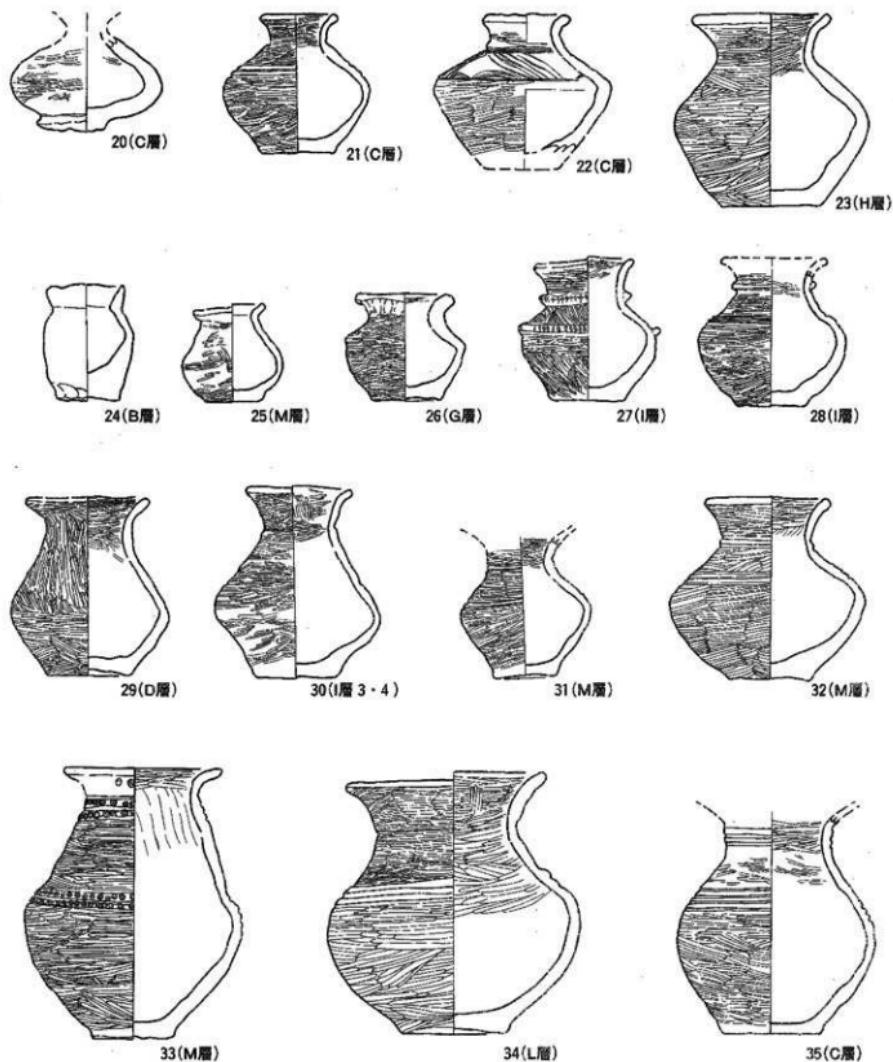
SD515-B

0 1 : 50 2m

第6図 東奈良遺跡 SD515・SD515-B断面図

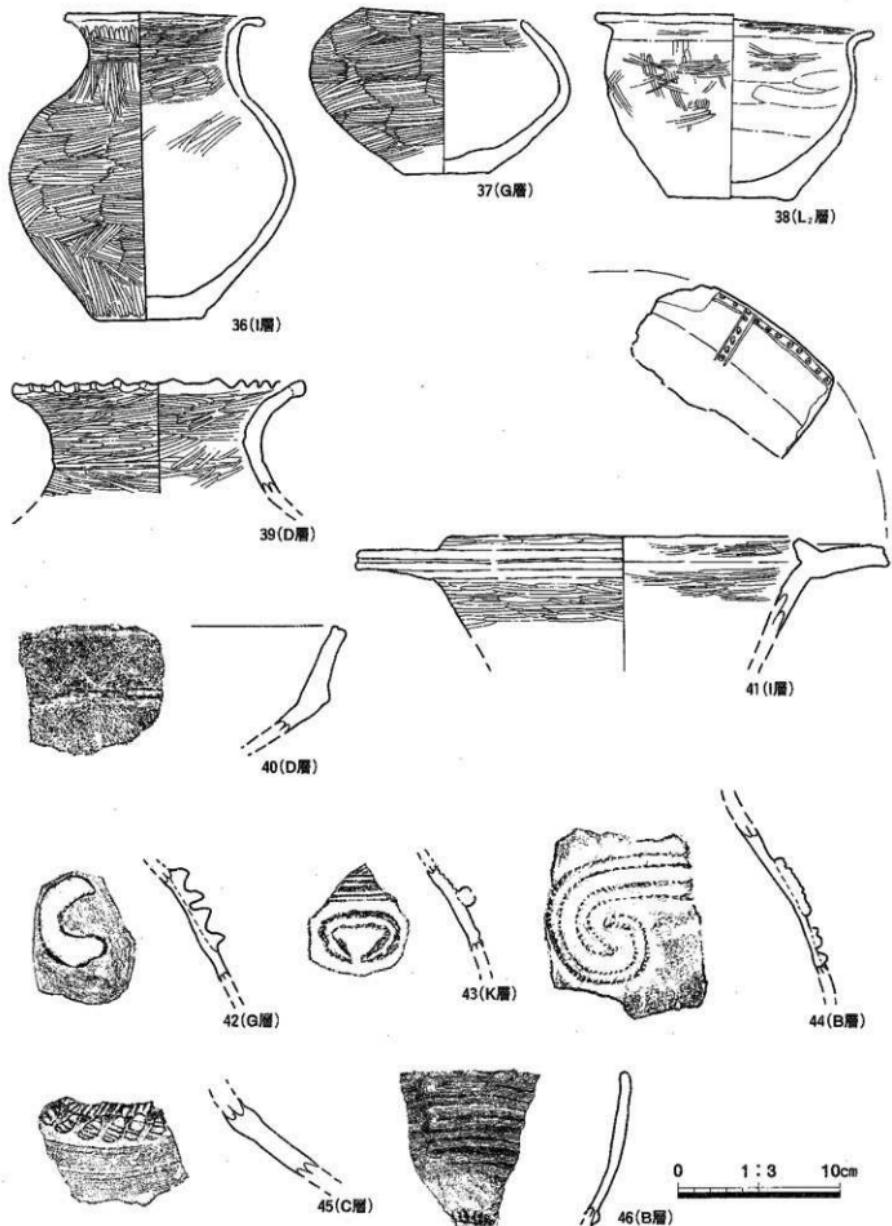


第7図 東奈良遺跡 (SD502・B) 出土遺物 (1) 0 1:3 10cm

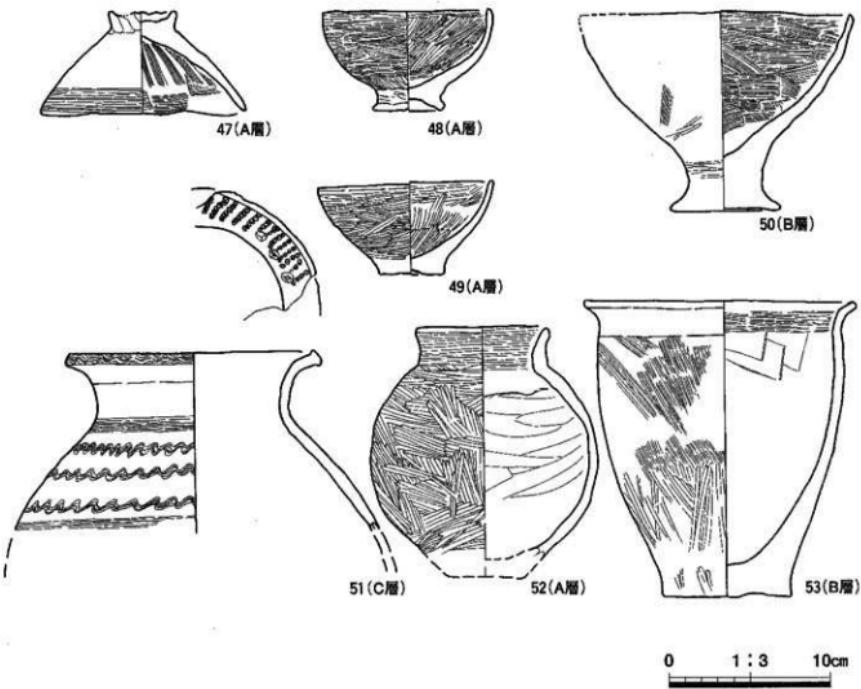


0 1:3 10cm

第8図 東奈良遺跡 (SD502・B) 出土遺物 (2)



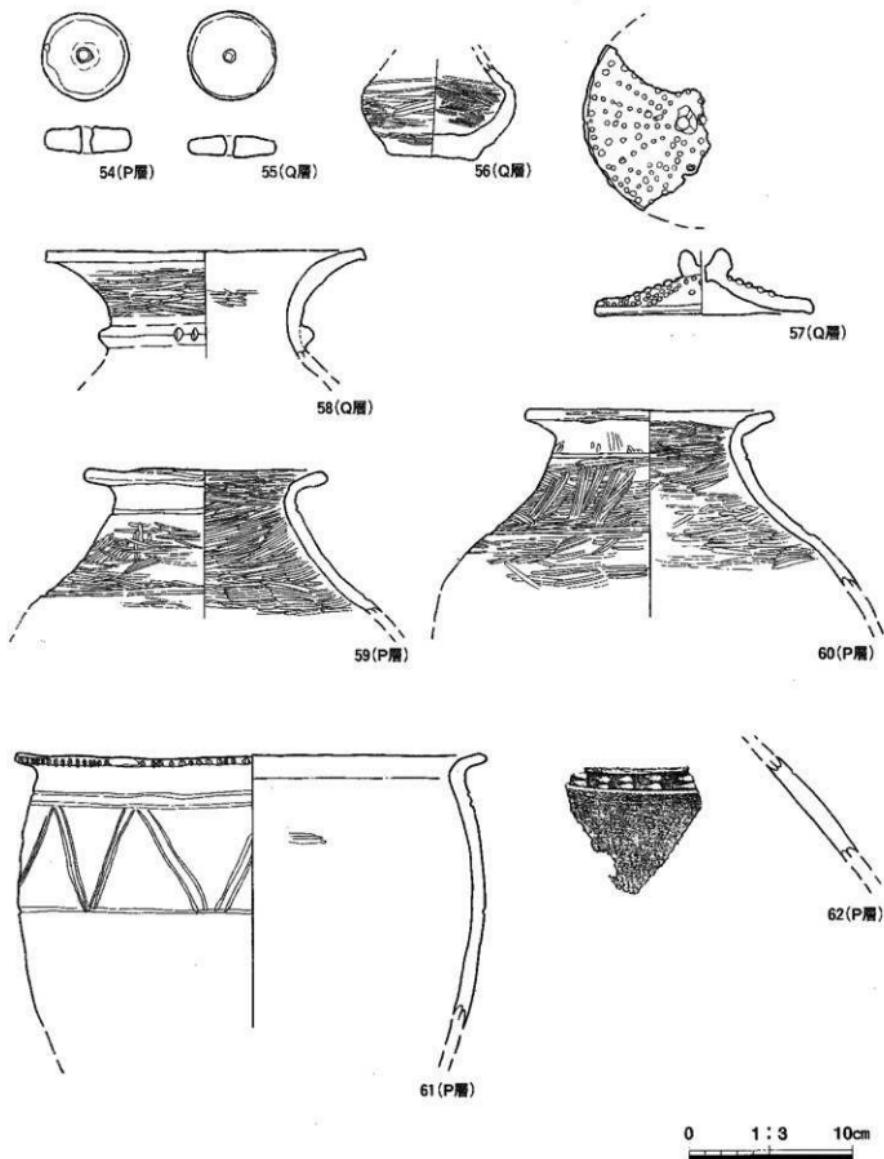
第9図 東奈良遺跡 (SD502・B) 出土遺物 (3)



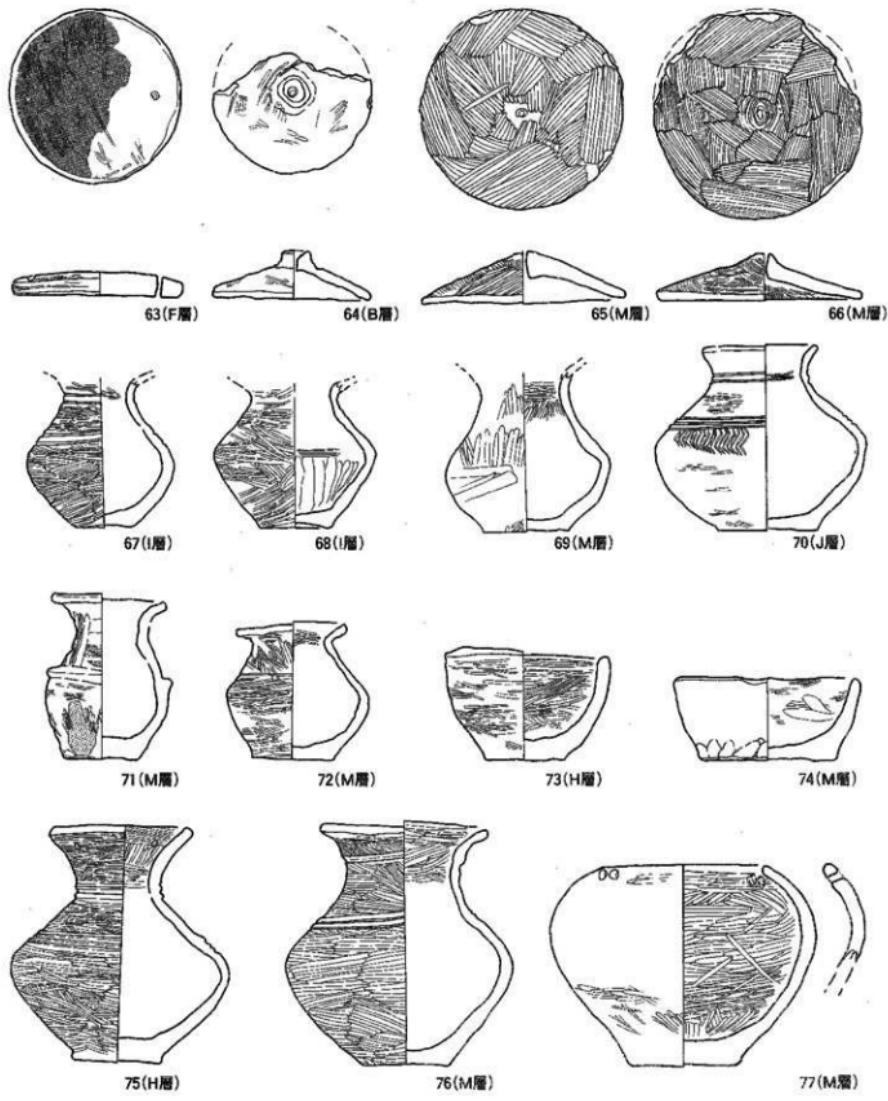
第10図 東奈良遺跡（SD502・B）出土遺物（4）

まとめ

出土遺物から S D502や S D601、S D515は弥生時代前期前半頃には開削されていたことが改めて確認された。埋没も弥生時代前期或いは中期初頭頃には埋没し、中期段階で新たに再掘削される。また、S D502に見られた S D515側の埋土に粘土ブロック上が大量に流れ込む状況は上墨状の構築物を想定させる。さらに、S D515に關しても黄褐色粘土ブロック土はS D502側から流れ込んだ量の方が多いことからも窺える。柱穴に関してはS D502のカーブの内側では数え切れないので柱穴が検出されているが、上墨状の部分に小柱穴群で構成する方形の $2.1 \times 2.5\text{m}$ の建物（S B601）らしきものが見られる。この調査では弥生時代前期に属する遺構群が多数を占め、中期初頭段階（II様式）の遺構は土塙等が散見される程度で中期後半（IV様式）になって再び土塙や井戸、溝を中心に遺構数が増加する。今後、外側に展開する環壕との関連が注目される。

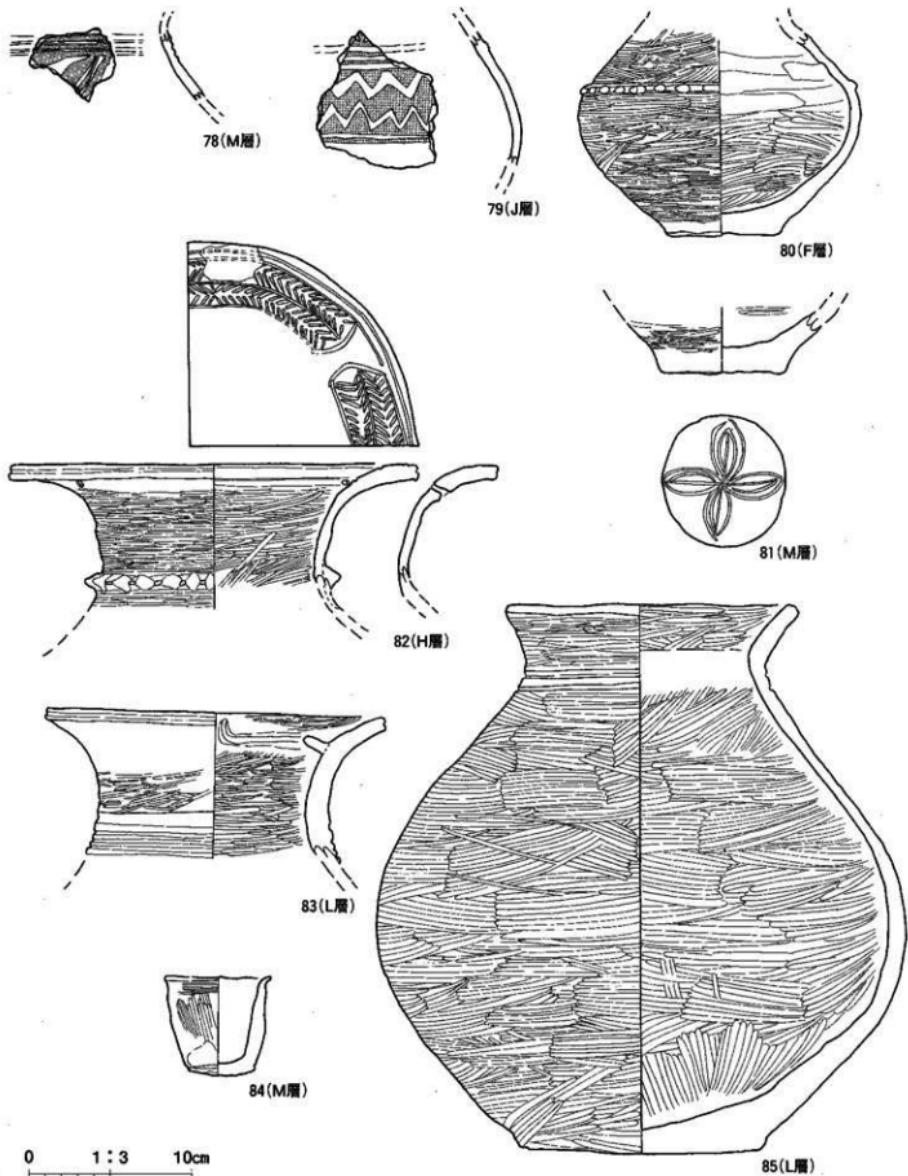


第11図 東奈良遺跡 (SD601・B) 出土遺物 (5)

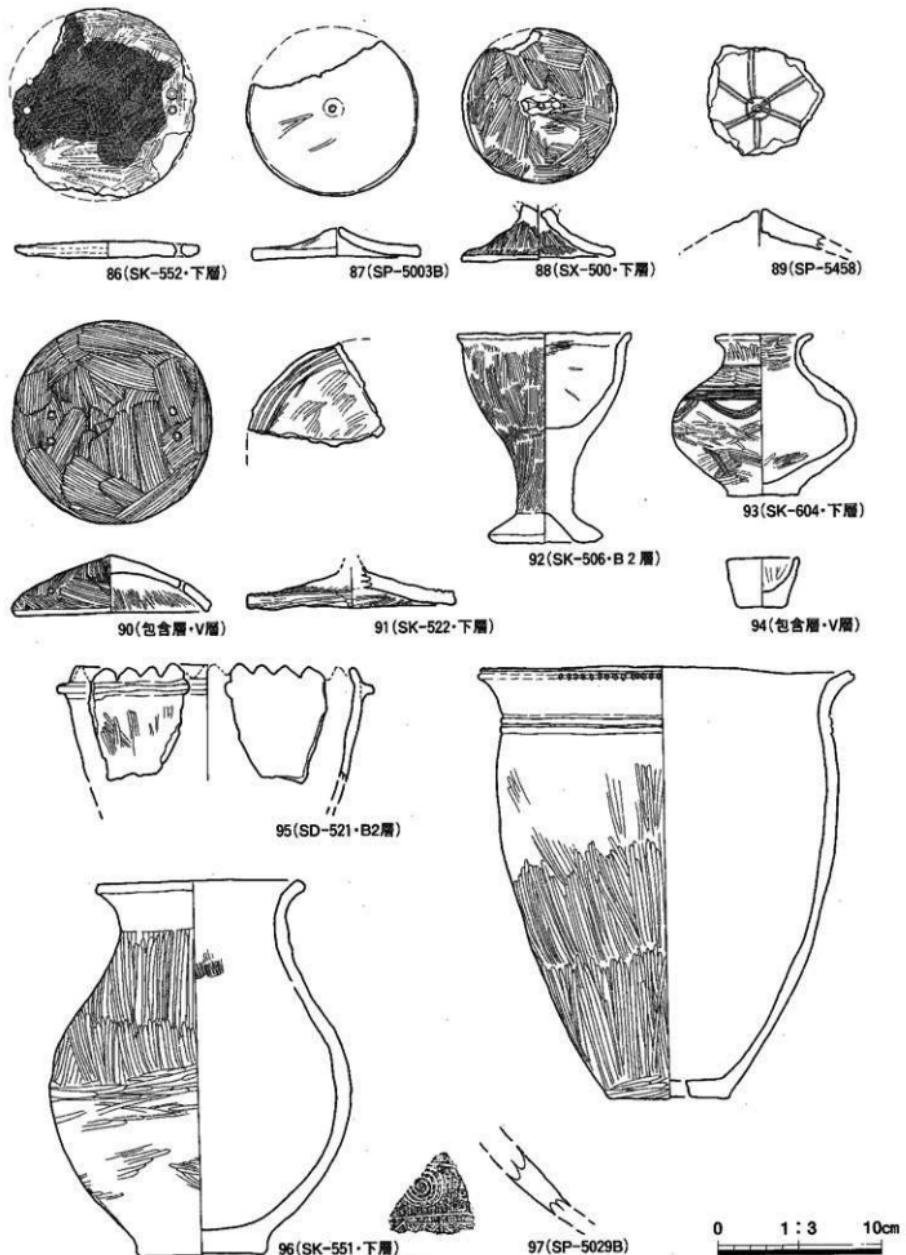


0 1 : 3 10cm

第12図 東奈良遺跡 (SD515・B) 出土遺物 (6)



第13図 東奈良遺跡 (SD515・B) 出土遺物 (7)

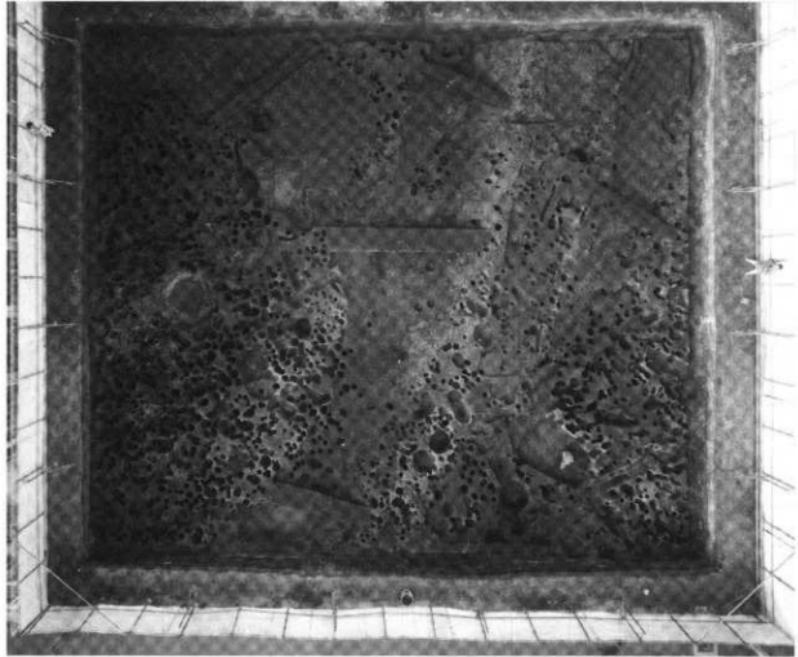


第14図 東奈良遺跡（SK他）出土遺物（8）

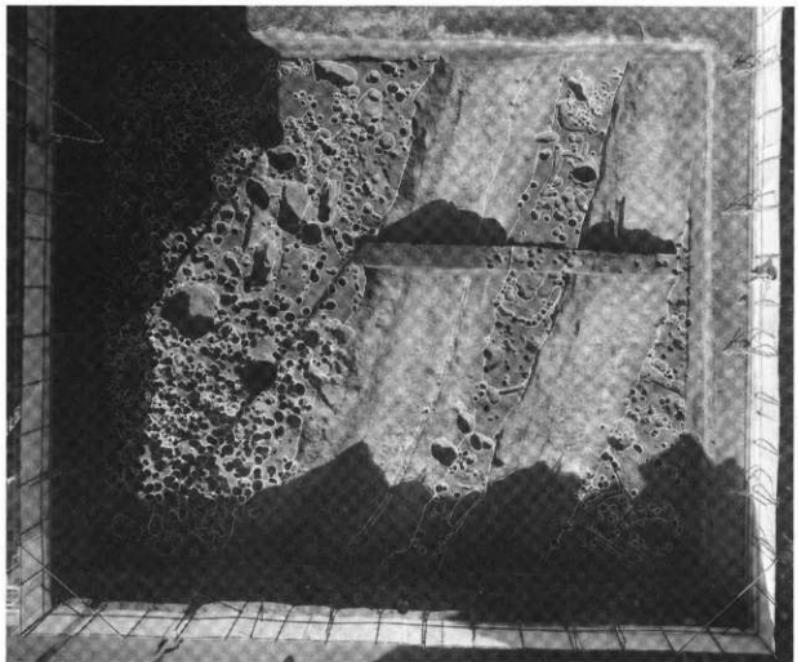
遺物観察表(1)

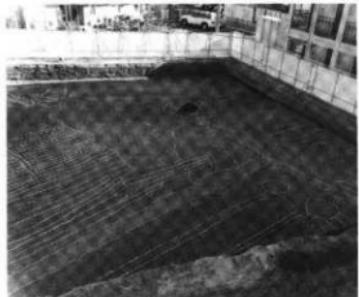
回数	名前	性別	年齢	種類	法 目	周 期	色 調	形 状	寸 法 (cm)	材 質	時 代	地 点	考	
第 14	1 SF0600D	未定	1.0	石製品	白陶器	-	5.5	-	1.4	-	ヘラ形・ ナギ	黄・青褐色	-	○○ ○ 40 銅先端期 前鉄後二期後半 約160.2cm
第 14	2 SF0600B	未定	1.0	石製品	白陶器	-	0.5	-	2.1	-	ヘラ形・ ナギ	米白色	-	○○ ○ 100 銅先端期 後半初期 約160.2cm
第 14	3 SF0602	-	-	D-CM	骨生土器	器	9.2	-	3.0	ヘラ形	ヘラ形	淡青色	△○ ○ 75 銅先端期 後半中期 約160.4cm	
第 14	4 SF0601B	T-AG	MW	骨生土器	器	10.0	-	3.3	ナギ	ヘラ形	米白色	淡青色・青褐色	○○ ○ 25 銅先端期 後半中期 約160.5cm	
第 14	5 SF0601H	T-AG	MW	骨生土器	器	7.8	-	3.7	ナギ	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 95 銅先端期 後半中期 約160.5cm	
第 14	6 SF0602B	E-AG	EM	骨生土器	器	11.0	-	3.4	ヘラ形	ヘラ形	二重・淡青色	△○ ○ 40 銅先端期 後半中期 約160.6cm		
第 14	7 SF0602	A-AG	EM	骨生土器	器	12.0	-	4.0	ヘラ形	ヘラ形	米白色・淡青色	△○ ○ 80 銅先端期 後半中期 約160.7cm		
第 14	8 SF0602	A-AG	EM	骨生土器	器	11.2	-	3.3	ヘラ形	ヘラ形	米白色	淡青色	○○ ○ 80 銅先端期 後半中期 約160.8cm	
第 14	9 SF0602	C-AG	CM	骨生土器	器	11.3	-	3.9	ヘラ形	ヘラ形	米白色	淡青色	○○ ○ 100 銅先端期 (1-2)	
第 14	10 SF0602	A-AG	CM	骨生土器	器	13.5	-	4.9	ヘラ形	ヘラ形	米白色	淡青色	○○ ○ 100 銅先端期 後半中期 約160.9cm	
第 14	11 SF0602H	-	140	骨生土器	器	16.0	-	13.9	ナギ	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 (1-2)	
第 14	12 SF0602B	中少 少子	GEM	骨生土器	器	5.0	-	4.2	4.0	ヘラ形	米白色	淡青色	○○ ○ 100 銅先端期 後半中期 約161.0cm	
第 14	13 SF0602	T-AG	MW	骨生土器	器	6.3	-	1.6	7.0	ナギ	ヘラ形	淡青色	△○ ○ 95 銅先端期 後半中期 約161.1cm	
第 14	14 SF0602	B-AG	CM	骨生土器	器	5.2	-	2.6	4.1	ヘラ形	米白色	淡青色	○○ ○ 100 銅先端期 後半中期 約161.2cm	
第 14	15 SF0602B	D-AG	EM	骨生土器	器	6.0	-	15.0	4.4	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 100 銅先端期 後半中期 約161.3cm	
第 14	16 SF0602B	D-AG	MW	骨生土器	器	7.0	-	3.9	6.0	ナギ	ヘラ形	淡青色	△○ ○ 90 銅先端期 (1-2)	
第 14	17 SF0602B	D-AG	CM	骨生土器	器	5.5	-	5.2	4.6	ナギ	ヘラ形	淡青色	○○ ○ 100 銅先端期 後半中期 約161.4cm	
第 14	18 SF0602	C-AG	CM	骨生土器	器	6.7	-	5.9	7.2	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 100 銅先端期 後半中期 約161.5cm	
第 14	19 SF0602	少子 少子	CM	骨生土器	器	6.5	-	6.2	7.0	ナギ	ヘラ形	淡青色	△○ ○ 90 銅先端期 後半中期 約161.6cm	
第 14	20 SF0602	D-AG	CM	骨生土器	器	9.2	-	4.1	5.9	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 約161.7cm	
第 14	21 SF0602B	D-AG	CM	骨生土器	器	5.0	-	4.8	4.5	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 約161.8cm	
第 14	22 SF0602	F-AG	CM	骨生土器	器	4.7	-	10.7	-	8.7-ナギ	ヘラ形	淡青色	△○ ○ 90 銅先端期 (1-2)	
第 14	23 SF0602B	A-AG	MW	骨生土器	器	6.1	-	11.8	5.8	11.6	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	24 SF0602	B-AG	MW	骨生土器	器	4.6	-	6.4	5.8	7.0	ナギ	ナギ	淡青色	△○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	25 SF0602B	D-AG	MW	骨生土器	器	4.5	-	6.1	5.8	5.8	コナギ	淡青色	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	26 SF0602B	D-AG	CM	骨生土器	器	2.2	-	7.2	4.2	6.6	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 100 銅先端期 後半中期 約161.9cm
第 14	27 SF0602B	D-AG	CM	骨生土器	器	5.8	-	8.8	4.4	8.9	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 約162.0cm
第 14	28 SF0602	D-AG	CM	骨生土器	器	9.8	-	5.8	8.4	-	ヘラ形	淡青色	淡青色	△○ ○ 90 銅先端期 (1-2)
第 14	29 SF0602	D-AG	CM	骨生土器	器	7.4	-	9.7	3.2	11.0	ナギ	ナギ	淡青色	△○ ○ 90 銅先端期 (1-2)
第 14	30 SF0602B	D-AG	CM	骨生土器	器	6.6	-	10.1	4.9	13.8	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	31 SF0602B	D-AG	MW	骨生土器	器	8.0	-	7.8	8.6	-	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	32 SF0602	D-AG	MW	骨生土器	器	12.0	-	12.0	11.2	11.2	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 100 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	33 SF0602B	D-AG	MW	骨生土器	器	7.3	-	11.9	5.0	11.8	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 100 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	34 SF0602B	D-AG	MW	骨生土器	器	9.0	-	12.0	2.0	16.5	ヘラ形	ナギ	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	35 SF0602	D-AG	CM	骨生土器	器	11.8	-	15.4	6.4	16.0	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	36 SF0602	D-AG	CM	骨生土器	器	12.0	-	6.0	13.5	-	ヘラ形	淡青色	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	37 SF0602B	A-AG	MW	骨生土器	器	12.3	-	17.8	6.3	16.8	ヘラ形	ナギ	淡青色	△○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	38 SF0602	A-AG	MW	骨生土器	器	16.1	-	15.9	5.3	10.1	ヘラ形	ナギ	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	39 SF0602B	B-AG	CM	骨生土器	器	16.9	-	16.9	7.6	10.5	ヘラ形	ナギ	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	40 SF0602	B-AG	CM	骨生土器	器	17.0	-	6.6	-	9.5	ヘラ形	ナギ	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	41 SF0602B	D-AG	CM	骨生土器	器	12.3	-	6.3	-	9.5	ヘラ形	ナギ	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	42 SF0602	D-AG	CM	骨生土器	器	12.8	-	6.3	-	-	ヘラ形	ナギ	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	43 SF0602	A-AG	CM	骨生土器	器	13.0	-	-	-	-	ヘラ形	ナギ	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	44 SF0602	B-AG	CM	骨生土器	器	13.0	-	-	-	-	ヘラ形	ナギ	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	45 SF0602	D-AG	CM	骨生土器	器	13.0	-	-	-	-	ヘラ形	ナギ	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	46 SF0602	D-AG	CM	骨生土器	器	13.0	-	-	-	-	ヘラ形	ナギ	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	47 SF0602	A-AG	CM	骨生土器	器	12.6	-	-	-	-	ヘラ形	ナギ	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	48 SF0602	A-AG	CM	骨生土器	器	18.1	-	4.0	6.2	9.5	ヘラ形	ナギ	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)
第 14	49 SF0602	A-AG	CM	骨生土器	器	18.0	-	3.9	5.8	9.5	ヘラ形	ナギ	淡青色	○○ ○ 90 銅先端期 後半中期 (1-2)

遺物觀察表（2）



第2遺構面全景（真上から）





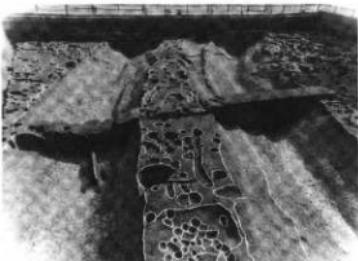
第1 遺構面全景（北東から）



第2 遺構面全景（北から）



第3 遺構面全景（北から）



左：SD515B／右SD502（北から）



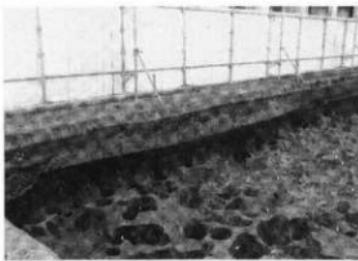
SD502-B(内環濠)・SD601土層断面(北から)



SD515-B(外環濠)土層断面(南から)



調査区画断面図(南から)



調査区画断面図(東から)

東奈良遺跡

所在地 茨木市東奈良三丁目114・115

調査原因 共同住宅建設事業

調査期間 平成16年3月23日～平成16年6月9日

調査面積 532m²

調査担当 中東 正之

調査結果

東奈良遺跡は、千里丘陵から東方向に流れる小河川等によって形成された扇状地性平坦面と、遺跡の東側を流れる元茨木川が形成した冲積面に成立している。昭和46年、小川水路の改修工事に際して遺跡が発見されて以来、多くの発掘調査が実施され、弥生時代の環壕集落をはじめとする、弥生時



位置図

代前期から中世に至る複合遺跡として、南北約1.2km、東西約1kmの包蔵範囲が周知されている。

本調査地は、東奈良二・三丁目、若草町にまたがる、東奈良土地区画整理地区内に位置する。同地区は、環壕集落の中心部から北東域をその範囲に捉えており、平成11年度に実施された区画道路部分の調査では、標高7m前後の扇状地性平坦面に立地する、弥生時代前期の環壕5～6条と同中期の環壕2～3条が廻る集落の概要が明らかとなった。扇状地性平坦面（集落城）は、北西から南東方向に緩やかに下っており、区画整理地区東辺を南北に流れる現在の小川水路下に存在する旧河道が形成した段差地形を以て終端となる。旧河道以東は、標高5.5m前後の低い冲積面が広がっている。本調査地点は、小川水路に面した南東隅の区画である。小川水路沿いは、旧河道、環壕、そして集落内から旧河道に注ぐ排水溝等、多くの溝が集中する地区である。隣接する既往の調査地として、北隣の区画道路第4調査区、南隣の東奈良公民館（平成3年度発掘調査）などがあり、その遺構検出面を本調査地とあわせて示した（第20図）。

基本層序は、南壁断面（第19図）の第1～9層とする。検出遺構は、第9層地山層上面を検出面として、環壕3条、溝約20条、井戸6基、土塙約10基、柱穴1,400口以上を数える。時期は、弥生時代前期後半～同中期初頭を主体とするもので、弥生時代前期、弥生時代中期後半から古墳時代前期初頭、古墳時代から奈良時代、中・近世のものがある。当地より西方では、各時期の遺構面が確認されているが、当地に至っては一部を除いて欠如しているため、地山層上面を検出面とした。これは、南北隣接調査地も同様の状況である。検出面は、小川水路に向けて下る標高6.1～6.4mの緩傾斜を呈している。以下、検出遺構から環壕について概説する。

環壕1は、溝幅4m前後、深さ1.1～1.2mを測る。二段の掘形ながら、やや平坦な底面で、断面形は台形に近い。8層ほどに分かれる埋土の下層遺物は、概ね弥生時代前期末のものである。中・上層の遺物は、さらに次の段階（畿内2様式）への傾向が強まり、遺構数が急激に増える弥

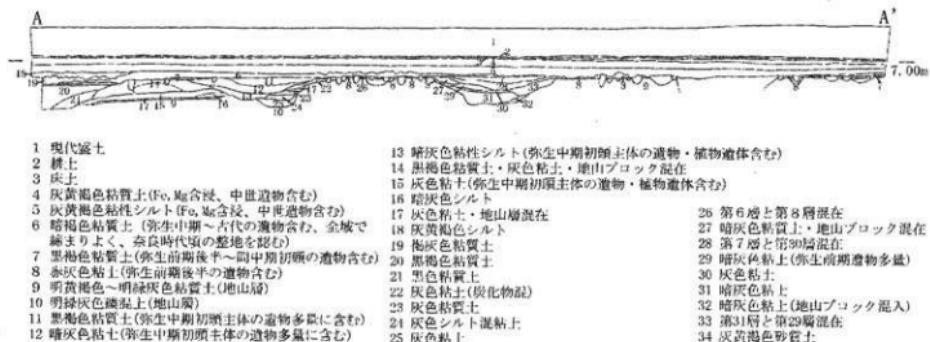
生時代中期初頭の段階には、完全に埋没したと考えられる。埋没後、同中期後半には一部を溝として利用するため、改修した痕跡が確認できる。

環壕-2以東の堆積層は、湿润で複雑な層序を示していた。その上面は、湿地状の緩やかな落ち込みを呈し、上層から掘り込まれた柱穴等も減少する。環壕-2は、溝幅2m前後、深さ1m程を測る、比較的小規模の環壕である。その東肩部を削るように、やや蛇行しながら流れ、東奈良公民館にも続くSD-24が重複する。埋上下層の遺物は、環壕-1に先行した形式差が認められ、弥生時代前期後半に比定される。SD-24との時期差は、あまり感じられない。

また、環壕-2の外側を、並行関係にある環壕-3が廻っており、弥生時代前期では最外縁を廻る環壕となる。当地では削平のため、これをプランで検出することはできなかったが、下層に該当するとみられる堆積層から、開削時は、並行関係を保って廻っていたものと推測される。

出土遺物は、包含層、環壕内などから出土した、壺類、瓶、鉢、高杯、器台などの弥生上器が大半を占める。その時期は、前期後半から中期初頭が最も多く、次いで中期後半が主体となる。他に庄内併行期の瓶などの土器類、占墳時代から奈良時代の土師器や須恵器などがある。石製品や木製品、動物遺体も出土している。とくに庄内併行期の井戸（SE-04）から出土した木製臼の半壊品が挙げられる。

本調査地においては、集落終端の段差地形から河道に至る湿润な立地にかかわらず、弥生時代前期としては最外縁となる環壕が開削されている。河道の影響はさけられなかったと推測されるが、意外に、洪水によるとみられる堆積は、ほとんど見受けられなかった。当地より100mほど西方、東奈良遺跡の集落中心部には、原初の環壕とみられる、小規模で古柏を示す溝が存在する。これを含めると、開削時期に差はあるが、弥生時代前期の段階で6条もの環壕が存在していたこととなる。しかし、同中期初頭には、拡大する居住域に埋没していったと推測される。次に環壕が開削され、あるいは埋没した環壕の一部が浚われて機能を回復するのは、空白期において、弥生時代中期の後半となる。空白期には、該当する遺構・遺物が大幅に減少しており、集落の消長を語る上で謎の期間となっている。



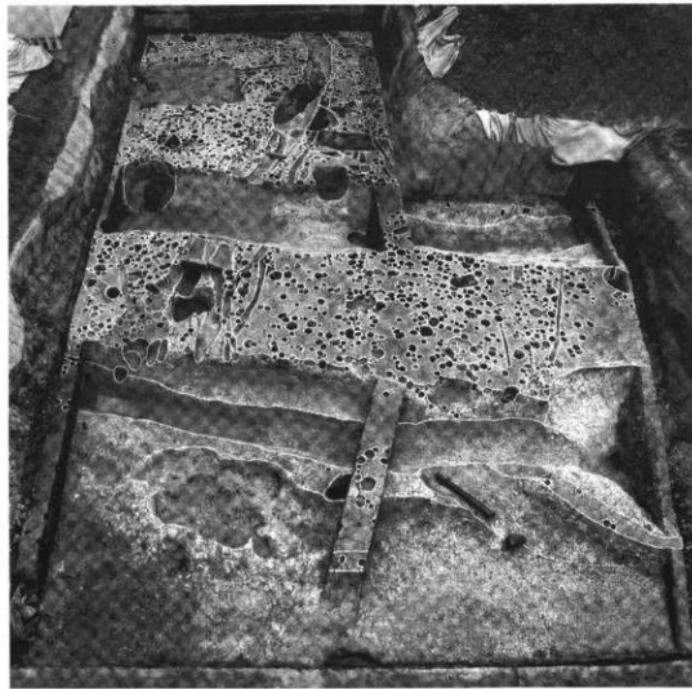
第19図 調査区 南壁断面土層図

第20図 東条良遺跡最終面平面図（中央）および隣接調査地平面図（左右）





調査区全景（西から）
(溝・環濠掘削前)



調査区全景（東から）
(溝・環濠掘削後)

第21図 東奈良遺跡 遺構面検出状況

東奈良遺跡

所在地 茨木市東奈良三丁目127

調査原因 共同住宅建設事業

調査期間 平成16年3月18日～平成16年6月7日

調査面積 549m²

調査担当 宮脇 薫

調査結果

この調査地は東奈良遺跡のほぼ中央に位置している。

建物建設部を2調査区に分け、立体駐車場部分を3調査区とし、第1調査区を1次調査、第2・3調査区を2次調査とした。



位置図

基本層位は区画整理に伴う盛土が約60～70cm、弥生時

代から中世・近現代の遺物を含む淡灰褐色土（第1包含層）が約10～15cm、弥生時代中期から古墳時代前期の遺物を含む淡褐色土（第2包含層）が約15～20cm、弥生時代前期～中期の遺物を含む褐色土（第3包含層）が約10～15cmであり、その下層は黄色土が堆積している。

調査は淡褐色土の上面を第1遺構面、褐色土の上面を第2遺構面、黄色土の上面を第3遺構面として検出し精査した。

淡褐色（第2包含層）から弥生時代中期の土器、古墳時代の土師器及び石器と共に、銅鏡2点、石製の管玉及び臼玉が出土した。

第1遺構面

各調査区において、幅約15～25cm、深さ約3～8cmの溝が途切れた状態で検出された。これらは近現代の耕作に伴う鋤溝とも考えられる。

第2調査区で検出された井戸一は、径が約82cm、深さ約75cmのほぼ円形である。幅20cmの薄板を井戸側として使用されていた。埋土内より近現代の磁器の楕が出土したことから近現代の農井戸と考えられる。他に柱穴、土塙が検出された。一部の遺構から土師器・須恵器の細片が出土したが遺構の明確な時期を決定することはできなかった。

第2遺構面

各調査区から径が約15～30cmの円形やほぼ円形の柱跡が検出された。重なって数多くが検出されているので建物としては捉えられない。ほとんどの柱穴の埋土から壺及び甕の弥生土器の破片が出土している。

溝が各調査区から検出されている。規模は幅が約15～35cmのものと、約40～70cmのものと規模の違いが認められる。深さはいずれにおいても約6～17cmと浅く、1層の堆積である。各溝から弥生中期の土器が出土している。

他に土塙が検出されている。形状はほぼ円形、楕円形、隅丸方形などである。規模は径、辺が約45cmから1.5mのものまである。出土遺物は弥生中期の土器が出土している。

第1調査区の南で、短径約1.15m、長径1.45mの楕円形、深さ約90cmの井戸ー2が検出した。井戸内からほぼ完形の壺5点、甕2点が出土した。いずれの土器も弥生時代中期（畿内Ⅲ様式後半）である。第2遺構面の遺構は出土した遺物から弥生時代中期である。

第3遺構面

各調査区から径が約18~35cmの柱穴が検出された。埋土から出土した遺物から弥生中期、弥生中期と前期、弥生前期の弥生土器があることから、時期が異なると考えられる。

土塙が各調査区から検出されていて、形状及び規模は異なるが弥生中期の土器が出土しているので同時期の遺構とみられる。

溝も各調査区から検出されている。

第1調査区の溝は、幅が約25~45cmであり、途切れた状態で検出された。出土遺物から弥生時代中期のものと考えられる。

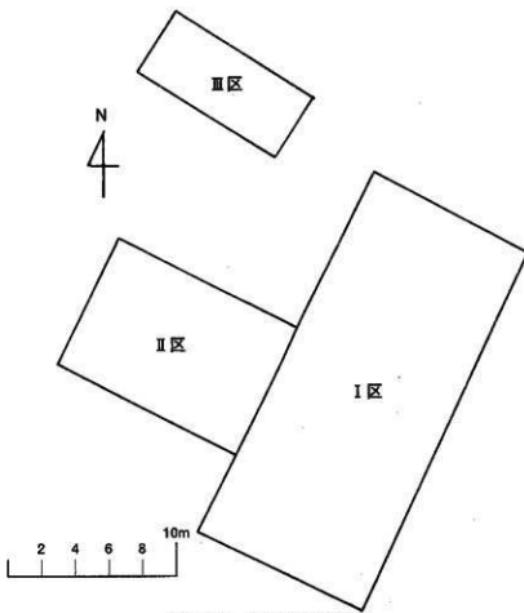
第2・3調査区の溝は、幅が約5~12cm、やや崩れた隅丸方形で途切れた状態で検出された。規模が竪穴式住居の周溝と同じ規模、形状から削平された竪穴住居の周溝と考えられる。

第1調査区の北西で一部途切れた状態で、短径約1.53m、長径が約3.32m、深さ約5cmの浅い落込みが検出された。底は平坦であり、厚さ約1~2cmの炭化物の堆積が認められた。また、一部火による赤変がみられる。落込みは焼失した竪穴式住居である可能性がある。

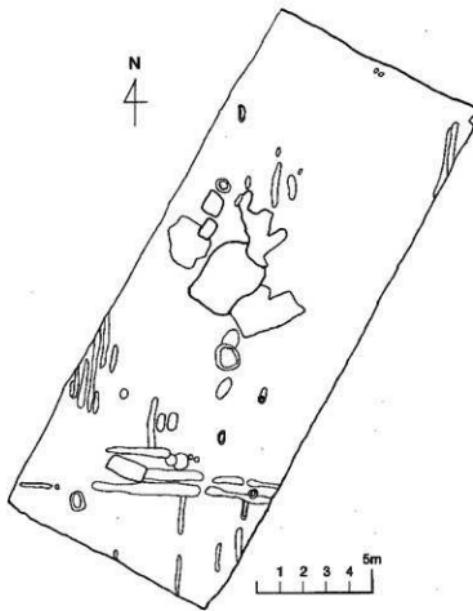
第1調査区の南端において、約1.5m²の範囲で地山に厚さ約1cmの炭の堆積があり、弥生時代前期の壺、甕が直立状態で出土し、その近くで石包丁が検出された。祭祀跡と考えられる。

弥生時代後期の遺構は検出していない。また、弥生時代中期の遺構が2面検出されたことにより、中期が2期に分けて考えられる可能性が出てきた。

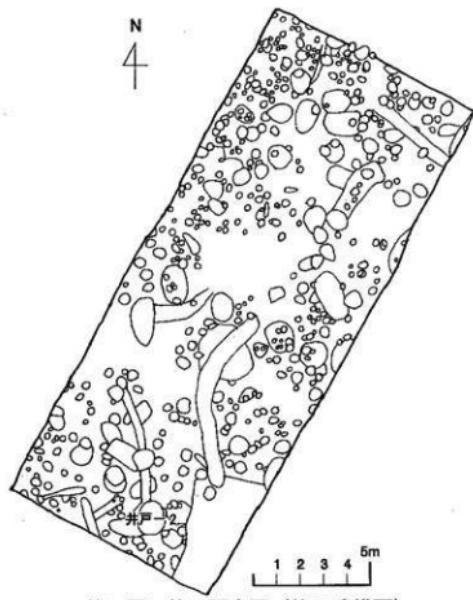
第2・3調査区の規模の小さい溝、第3調査区の落込みから今までほとんど明らかでなかった、住居の形態の一端を窺うことができる資料が得られた。



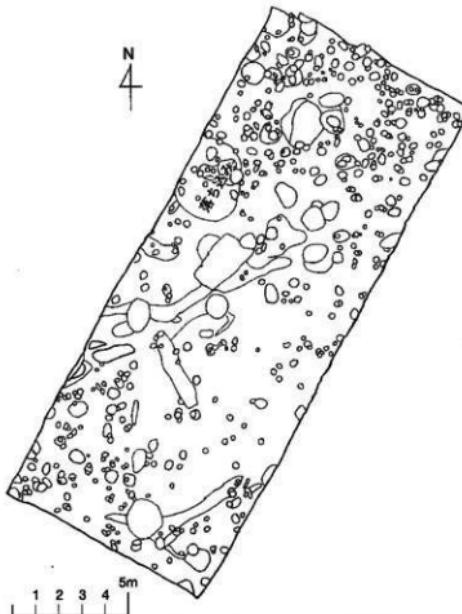
第22図 調査区配置図



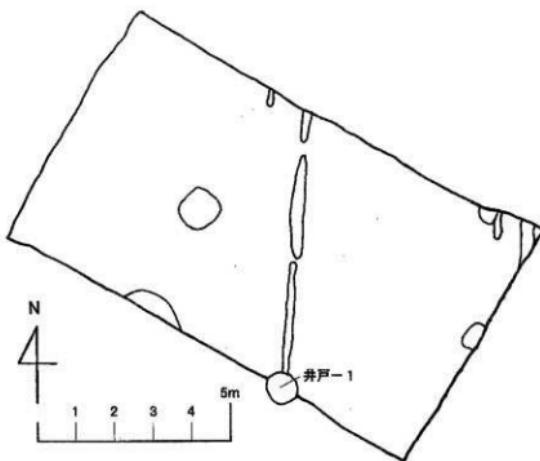
第23図 第I調査区（第I遺構面）



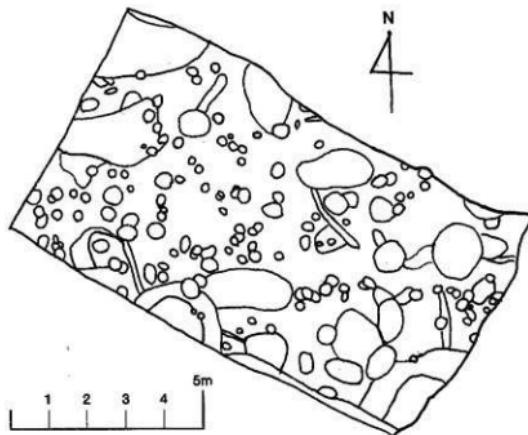
第24図 第I調査区（第II造構面）



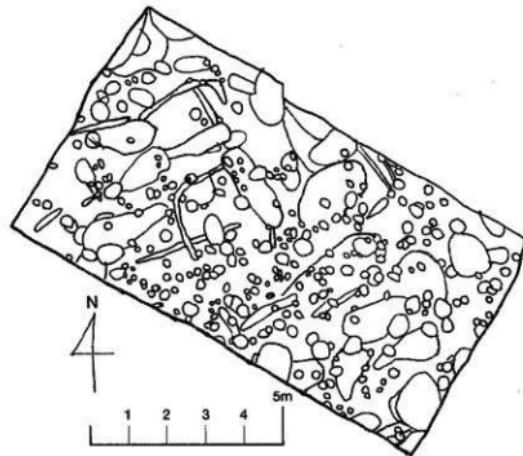
第25図 第I調査区（第III造構面）



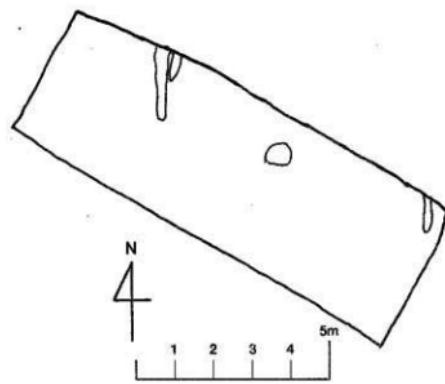
第26図 第II調査区（第I造構面）



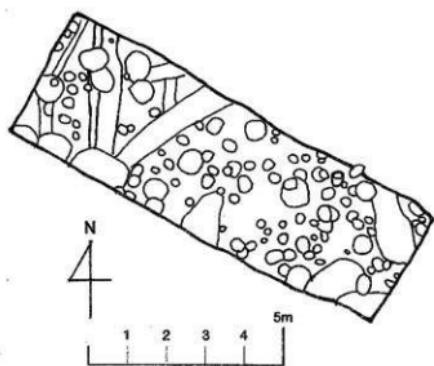
第27図 第II調査区（第II造構面）



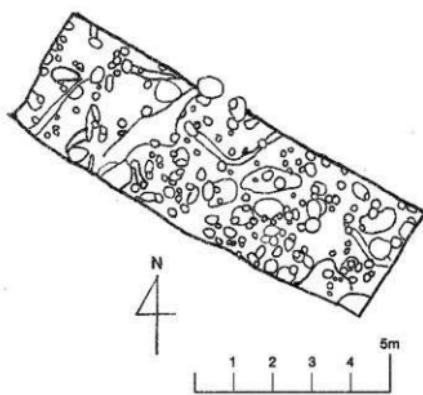
第28図 第Ⅱ調査区（第Ⅲ造構面）



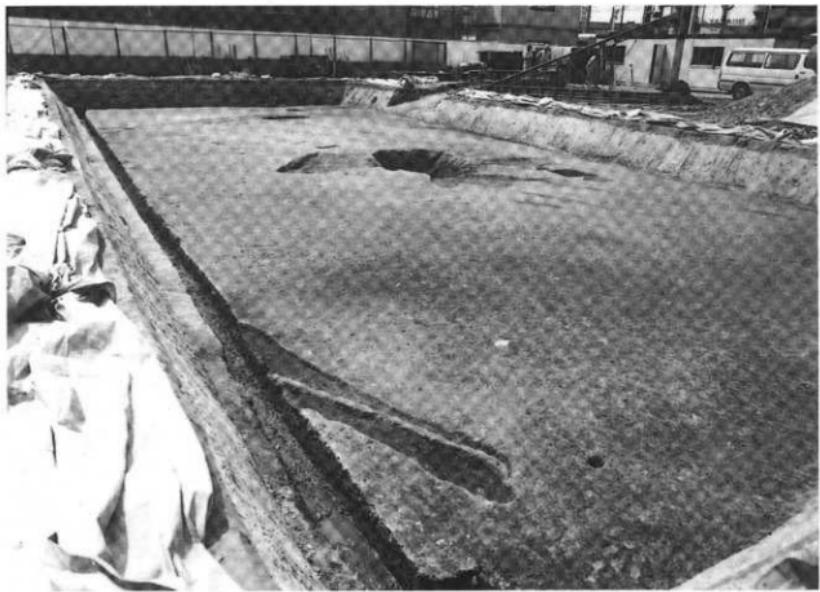
第29図 第Ⅲ調査区（第Ⅰ造構面）



第30図 第Ⅲ調査区（第Ⅱ造構面）



第31図 第Ⅲ調査区（第Ⅲ造構面）



第32図 第I調査区（第I遺構面）北から



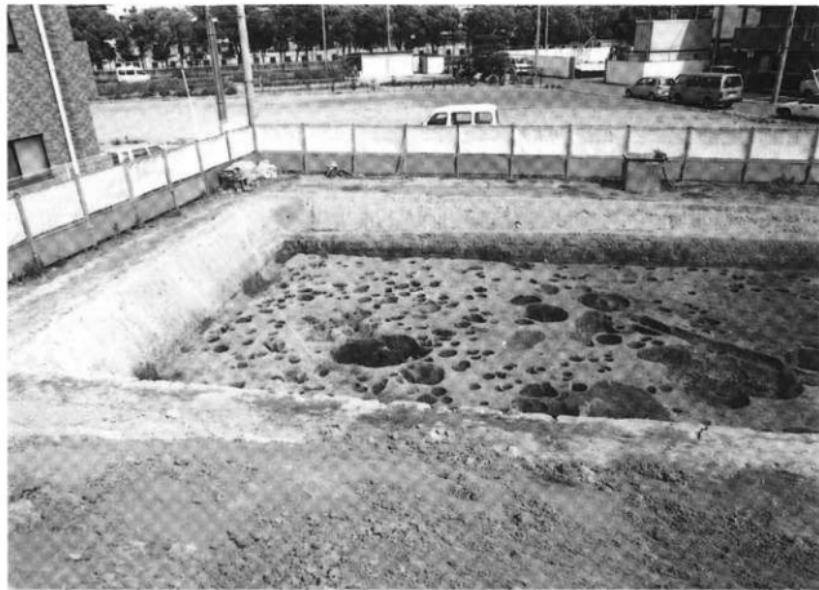
第33図 第I調査区（第I遺構面）南から



第34図 第I調査区（第II造構面）北から



第35図 第I調査区（第II造構面）南から



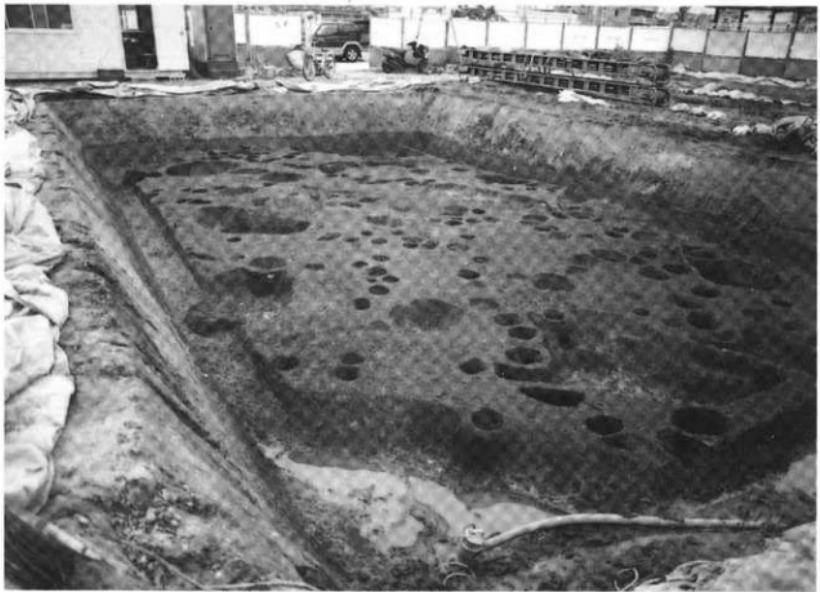
第36図 第I調査区（第III遺構面）北から



第37図 第I調査区（第III遺構面）南から



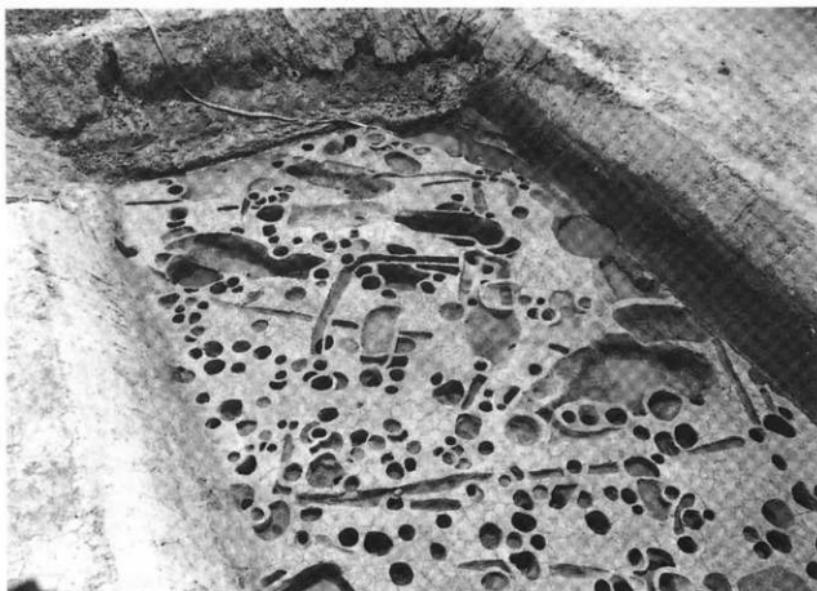
第38図 第Ⅱ調査区（第Ⅰ遺構面）西から



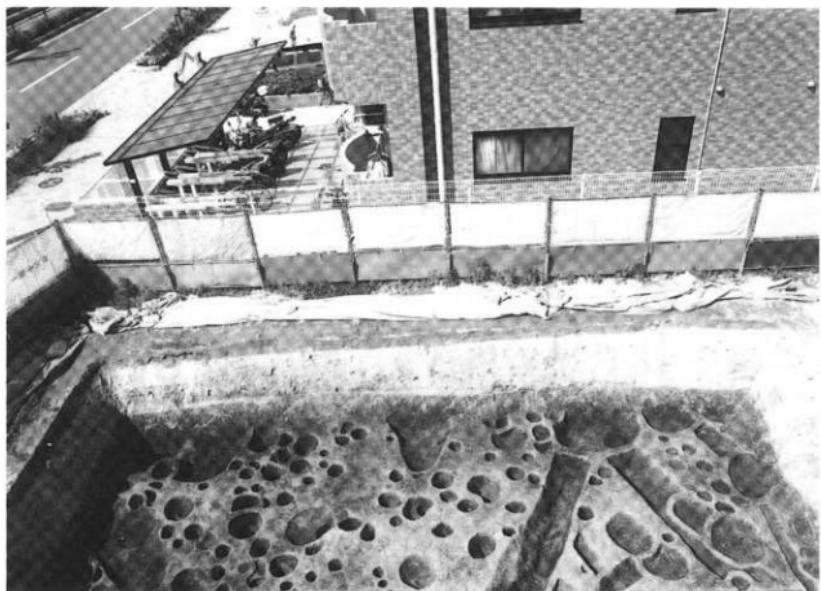
第39図 第Ⅱ調査区（第Ⅱ遺構面）西から



第40図 第II調査区（第III遺構面）西から



第41図 第III調査区（第I遺構面）西から



第42図 第Ⅲ調査区（第Ⅱ遺構面）西から



第43図 第Ⅲ調査区（第Ⅲ遺構面）西から

耳原遺跡

所在地 茨木市耳原三丁目地内

調査原因 宅地造成事業

調査期間 平成16年6月4日～平成16年10月12日

調査面積 7,517m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

耳原遺跡は、三島平野を南北に流れる安威川によって形成された扇状地の氾濫低地や丘陵部に立地し、東西約350m×南北約300mに広がる。段丘部においては地形分類によると下位段丘に分類され、この耳原遺跡ではこれまで縄文時代前半の土



位置図

器片の採集の例があり、生活の痕跡を示す時期のものとして、縄文時代晚期の深鉢棺を16棺検出している。その後の発掘調査により、弥生時代から古墳時代、近世へとこの地において人々が生活をしていた痕跡が見られ複合遺跡の様相をしている。

周辺での既往の調査としては、同丘陵地の東方約50mには古く1935年（昭和10年）に梅原末治氏によって横穴式石室と2基の家型石棺の実測が行われた事で知られる耳原古墳が存在する。その現況は盛土が大きく削平され、南北約20m、東西約16m、高さ約6mを測り、円墳を形作っていて、築造年代については石室内部に納められた二つの石棺からみて6世紀末、7世紀前半の二つの説がある。

鼻摺古墳は一辺が30m前後の方墳であり、築造年代は6世紀から7世紀にかけてのものと考えられている。

当該地は両古墳に挟まれた丘陵地と平坦部にあたっている。

丘陵地全体（6,442m²）を第1調査区として、標高の一番高い点（約29.6m）を境に東側部分（第1調査区東部）と西側部分（第1調査区西部）とした。また、丘陵の南側部分の平坦部（1,075m²）を第2調査区とした。

この丘陵地について、古地図等を調べると調査区の東にある耳原古墳及び西にある鼻摺古墳を含め、同じ丘陵地として繋がっていた事が分かった。このことから同調査区にも古墳が存在する可能性があることから表土を掘削する前に、この丘陵地の現況の地形測量を実施した。

基本層序

丘陵地部分の第1調査区では、表土（約35cm）、暗褐色砂質土層（約10cm）、褐色砂質土層（中世遺物包含層約25cm）、明褐色砂礫層（地山層）となる。第2調査区は、盛土層（約30cm）、にぶい黄褐色砂質土層（土師器片を含む約20cm）、黄褐色砂質土層（土師器片を含む約15cm）、褐色砂

質土層（土師器片を含む約5cm）、黒褐色砂質土層（約10cmの礫を多く含み、須恵器片を含む約15cm）、暗褐色砂層（地山層）に分けられる。

出土遺物

コンテナに16箱の量であった内訳は、第1調査区東部と南の第2調査区の各遺構からは、主に奈良から鎌倉時代に相当する遺物が出土した。全体的に三足土器が多くみられる。

第1調査区西部からは5世紀中葉の須恵器片を伴った埴輪列が丘陵上の西端付近から2列出土しており、その東側付近で天井石が欠落した6世紀後半のものと思われる小規模の横穴式石室を検出した。特筆すべきものに石室内からは、副葬品として金製環が1点、ガラス小玉が43点の他、須恵器片が出土した。石室の残存状態からみると東側から西側に向かって側壁が落込んでおり、かなり攪乱されたのか石室内から埴輪片も出土している。さらに石室周辺においては、盾形や家形とみられる埴輪片が出上している。

出土遺構

特筆すべきものは第1調査区西部の丘陵地の西端部付近で横穴式石室を検出した。表土を除去する前にいくつかの花崗岩の一部分が既に見えている状況であった。トレーナーを入れて慎重に掘り進めていくうちに、先に見えていた花崗岩の一つは一番底にあたる奥壁の一部であり、もう一つは天井石を取り除かれてバランスを崩した東側の側壁が東から西へ落ち込んだ状況の一部であることが分かった。東側の側壁が石室内に合計3石落ち込んでいた。

まとめ

1次調査の第1調査区東部及び第2調査区から、平安時代から鎌倉時代を中心とした遺構や遺物を検出し、一部では近世以降の瓦などの遺物も出土している。また、2次調査の第1調査区西部より検出された6世紀後半頃のものと考えられる横穴式石室や、金製環や数多くのガラス玉といった貴重な遺物など新しい発見もあった。特に金製環については、高槻市所在の梶原古墳群内D-1号墳石室から金製環が出土している。実際に高槻市立埋蔵文化財調査センターで実見したが類似する点がいくつか見られた。このことから、調査区一帯は耳原古墳・鼻摺古墳と合わせて古墳群であったとも考えられる。さらに後世の攪乱などにより確認できなかったが、5世紀代の埴輪列や須恵器の出土は、最初に方墳が造られ、その後同地点に石室を持つ円墳が築かれたと考えられる。

最後に大阪府教育委員会・高槻市教育委員会の方々から多くの貴重なご意見を賜り、記して感謝申しあげます。

参考

わがまち茨木—古墳編一

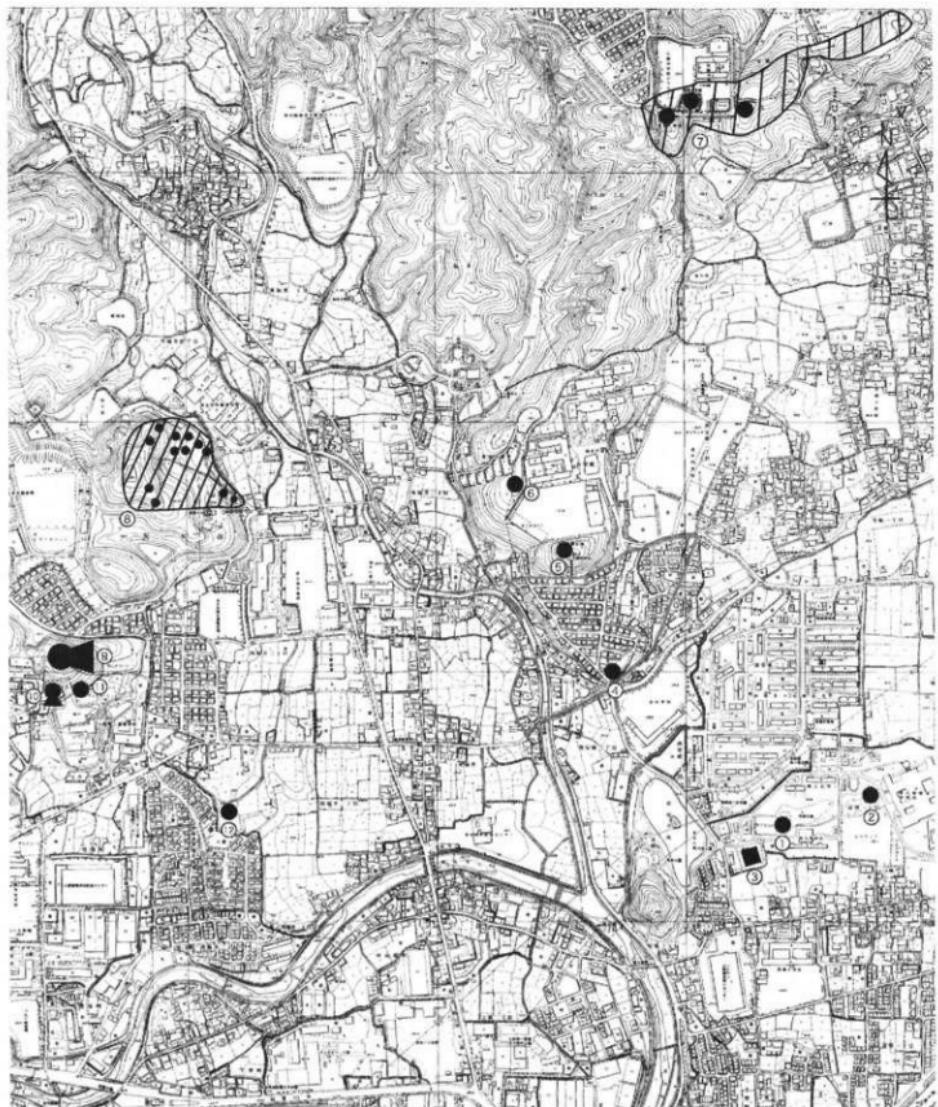
1990年3月 茨木市教育委員会

『耳原古墳の研究』

1996年9月 追手門学院大学考古学研究会

『梶原古墳群発掘調査報告書』

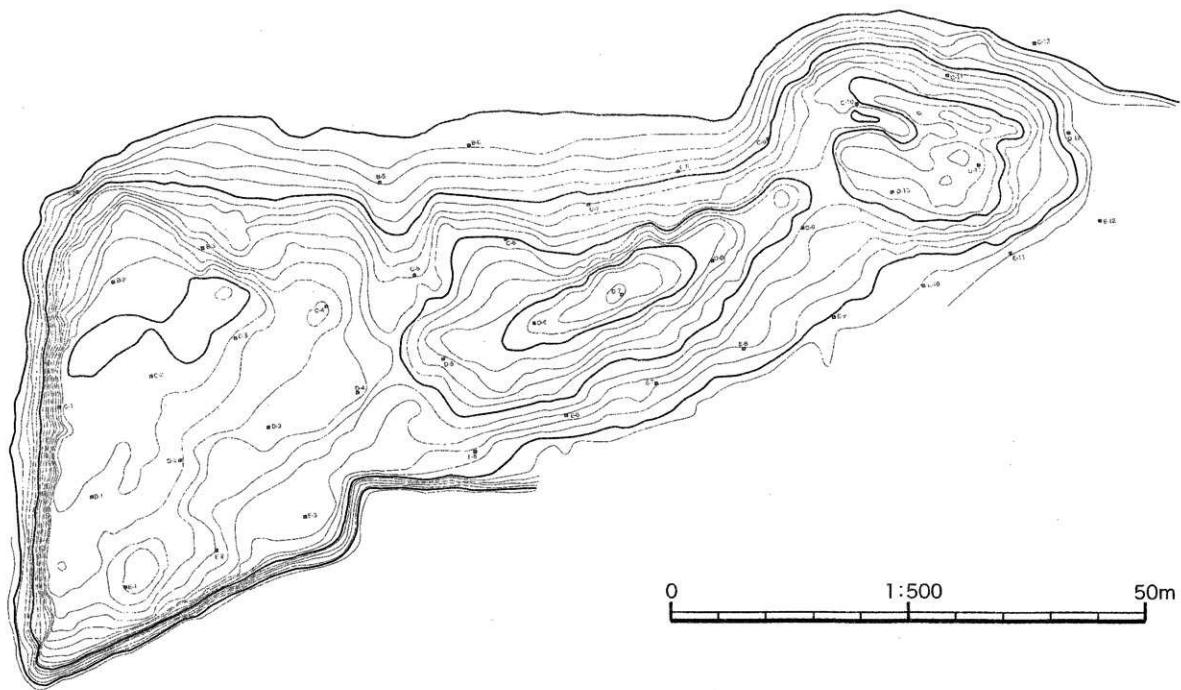
1998年3月 名神高速道路内遺跡調査会



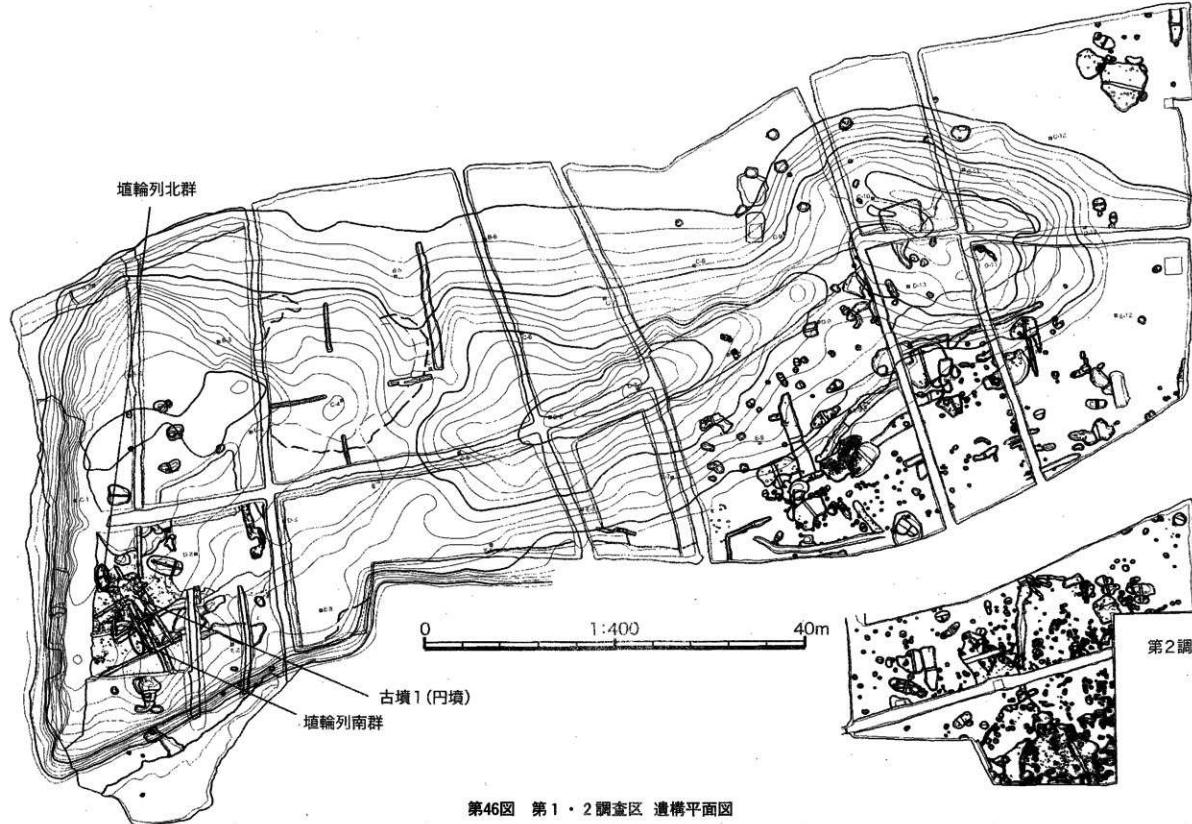
第44図 耳原西古墳周辺遺跡分布図

0 1:10,000 500m

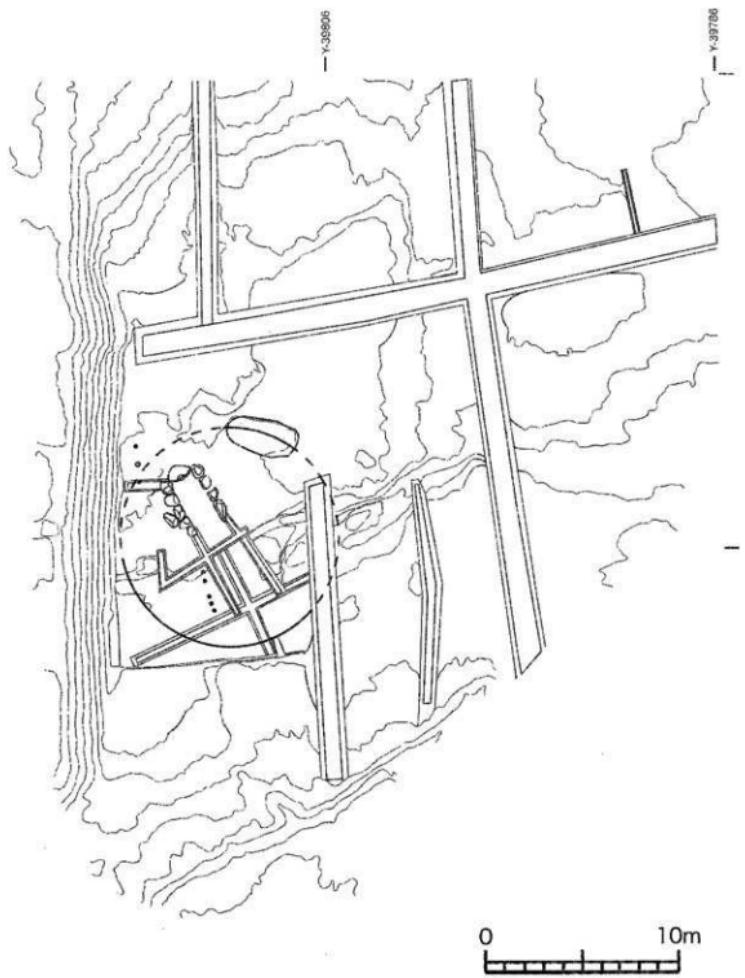
- 1. 耳原西古墳
- 2. 耳原古墳(大阪府史跡指定)
- 3. 鼻摺古墳(耳原方形墳)
- 4. 将軍山古墳
- 5. 将軍塚古墳
- 6. 真龍寺古墳
- 7. 安威古墳群
- 8. 新屋古墳群
- 9. 紫金山古墳(大阪府史跡指定)
- 10. 南塚古墳
- 11. 青松塚古墳
- 12. 海北塚古墳



第45図 第1調査区 調査前地形測量図



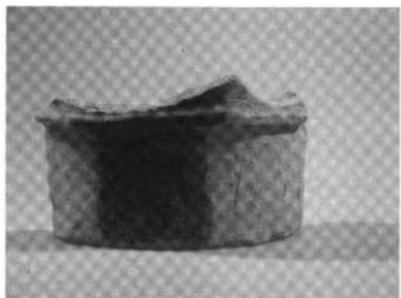
第46図 第1・2調査区 遺構平面図



第47図 耳原西古墳 範囲図



第48図 耳原西古墳 石室実測図



埴輪列北群出土 1号埴輪



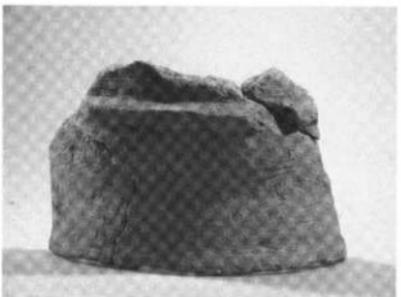
埴輪列北群出土 2号埴輪



埴輪列南群出土 2号埴輪



埴輪列南群出土 3号埴輪

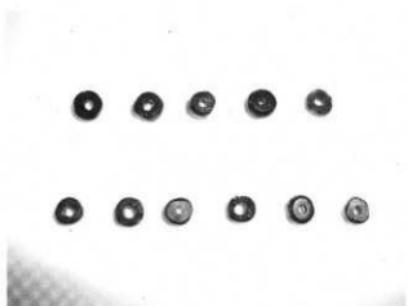


埴輪列南群出土 4号埴輪



埴輪列南群出土 5号埴輪

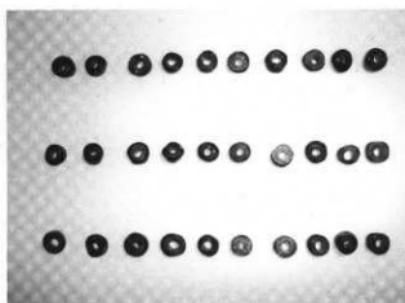
第49図 耳原西古墳 出土 円筒埴輪



玄室内上層出土 ガラス小玉



玄室内(狭道付近)最下層出土ガラス小玉



玄室内最下層出土 ガラス小玉



ガラス小玉 腕輪復元状況



玄室内最下層 金製環

第50図 耳原西古墳 石室玄室内出土 ガラス小玉・金製環

牟礼東遺跡

所在地 茨木市寺田町21・22-5・23-4・23-5

調査原因 共同住宅建設事業

調査期間 平成16年5月21日～平成16年5月27日

調査面積 106m²

調査担当 宮脇 薫

調査結果

この調査地は安威川の右岸に位置している。共同住宅が建設されることになり埋蔵文化財の確認の試掘調査を実施した結果、建設予定地の西端で中世の遺物を含む包含層が確認され、建物の基礎により埋蔵文化財に支障を来す範囲において調査を実施した。

駐車場跡であり、盛土が約80cmあり、耕土が約30～40cm、無遺物層の青灰色土約25cm、中世の瓦器および土師器等を含む淡青褐色土が約15cm堆積し、青灰色粘土層の上面が遺構面となっている。

検出遺構は、柱穴、溝、落込み状土塙である。柱穴は径が約20～35cmのほぼ円形であり、深さは約15cmである。

柱穴-1は短径が約42cm、深さ約17cmの長円形である。埋土から12～13世紀の瓦器の楕が完形で出土した。

溝-1は調査区の北でほぼ東西に検出された。規模は幅が約58～88cm、深さ約17cmである。溝内から瓦器及び土師器片が出土した。

溝-2は調査区の中央から南にかけて南北に途切れた状態で検出された。規模は幅が約55cm、深さ約7cmである。

上塙-1は短径が約1.05m、長径が1.7mの変形円形で、深さ約12cmの規模である。埋土から瓦器片が出土した。底面は平坦で柱穴1基が検出された。

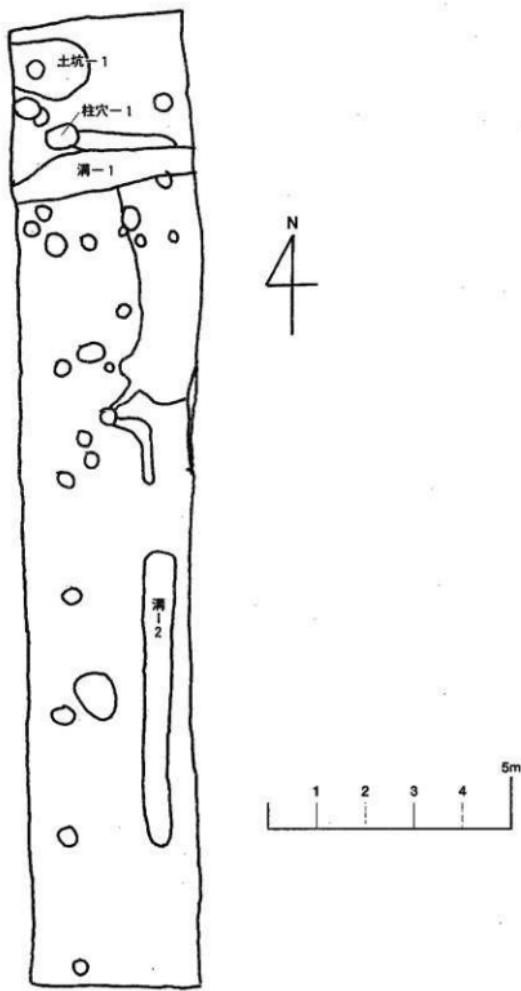
他の柱穴からは遺物は出土しなかった。

安威川の右岸地域においては隣接の牟礼遺跡以外、遺跡は見付かってはいなかったが、当地では明らかに中世の集落跡の存在が認められた。

今後の調査によって、牟礼遺跡との関係も明らかなものになっていくものと考えられる。



位置図



第51図 遺構図



第52図 南から



第53図 北から

東奈良遺跡

所在地 茨木市天王二丁目211-1

調査原因 共同住宅建設事業

調査期間 平成16年5月24日～平成16年6月3日

調査面積 65m²

調査担当 宮本 賢治

調査結果

東奈良遺跡は茨木市南部にあたる東奈良・奈良・沢良宜西・天王・若草町にまたがる標高7m前後の沖積平野に立地する、弥生時代前期から始まる複合遺跡である。

当該地は、弥生時代前期頃に営まれた集落の中心地と考えられる地点からやや南西より300m程の所にある駐車場跡地

である。なお、周辺の既往の調査では平成6年度に東方隣接地で柱穴や溝等の遺構が検出している。当地では、中世の生活遺構面（第1遺構面）、弥生時代の生活面（第2遺構面）が調査対象であった。

基本層序

上層より盛土層（約1.1m）、黄灰褐色粘質土層（約30cm）、黄灰色粘土層（約25cm 中世遺物包含層）、灰色砂質土層（約10cm）、灰色砂層（約5cm 弥生時代遺物包含層）、褐色粘質土層（地山層）となっている。

出土遺物

弥生時代の遺構面精査中より弥生土器の破片と水田の可能性のある遺構面のピット内よりガラス玉が出土した。

検出遺構

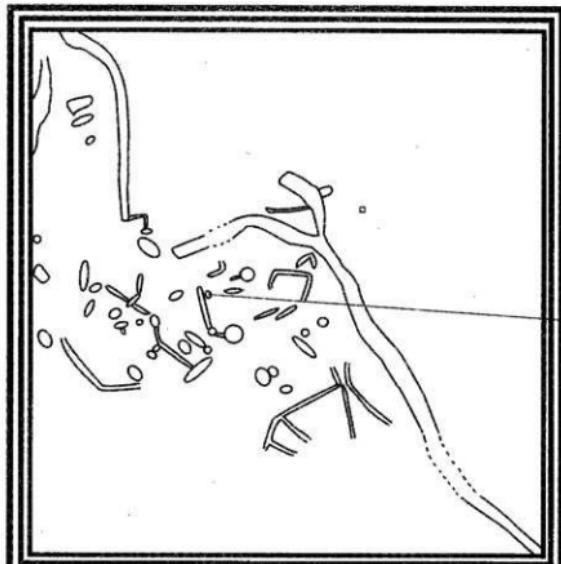
第1遺構面では中世の生活遺構面において、複数の牛や鳥などの小動物を中心とした足跡遺構を検出した。また、第2遺構面では先ほどにも述べたように水田面の可能性のある遺構を3面検出している。東奈良遺跡の弥生時代における環壕集落の生産遺構の検出例はこれまでになく、当地周辺においてその可能性が出てきている。

まとめ

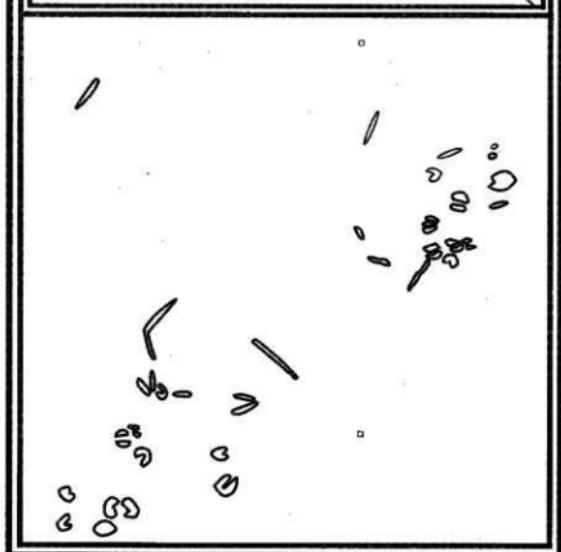
第1遺構面から中世の生活の時期の小動物の足跡遺構が検出された。また、第2遺構面での検出状況から水田の畦とみられる区画が施されたような痕跡が断面及びプランから認められ、水田となる可能性が高く、さらなる検討が必要である。これまでの東奈良遺跡の弥生時代に関する調査では、集落を構成するうえで欠かせない3つの要素である、衣食住のうちの食物の生産場所は検出されなかった。今後の周辺地域での調査に期待するものである。



位置図



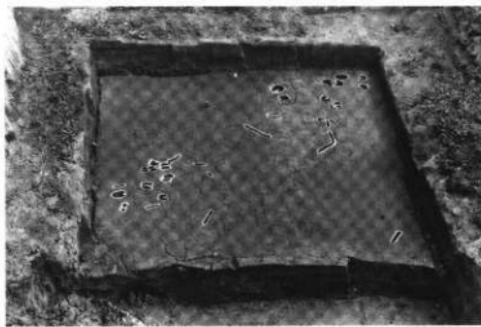
第2遺構面



第1遺構面

0 1:20 2m

第54図 東奈良遺跡 遺構平面図



第2遺構面検出状況(北から)



第2遺構面検出状況(北西から)



第2遺面ガラス玉出土状況(北から)

第55図 東奈良遺跡 遺構検出状況

総持寺遺跡

所在地 茨木市三島丘一丁目261-1他

調査原因 宅地造成事業

調査期間 平成16年5月24日～平成16年6月11日

調査面積 1,862m²

調査担当 黒須 靖之

調査結果

総持寺遺跡は、北摂山地から派生した下位段丘状の「富田台地」と呼ばれる上に立地している。この富田台地は南東に向かって緩く傾斜しながら大きく舌状に張り出し、東西約2km、南北約2.5kmの広大な段丘面を形成し、標高は15～30mを測る。遺跡の西側には比高5～6mの段丘崖を介して安威川が造りだした沖積地が広がり、東側は女瀬川・芥川が開析し、南側には沖積平野が広がる。総持寺遺跡はこの富田台地の南西部分にある。

この総持寺遺跡が立地する富田台地上の遺跡を見ると、台地の奥部に古墳時代中期の全長226mを測る太田茶臼山古墳（繼体天皇陵）や高槻市側に後期の全長190mを測る今城塚古墳が築造されている。そしてこれら大古墳に主として埴輪を供給した新池埴輪製作遺跡が存在する。

総持寺遺跡は弥生時代から中世に至る複合遺跡として周知されており、これまでに大阪府教育委員会および（財）大阪府文化財センター（以後、府教委およびセンターと呼称する）により大規模な発掘調査が近年実施されている。大阪府営茨木三島丘住宅の建替えに伴い、1994～2001年（平成6～13年）にかけて府教委が約23,500m²に及ぶ発掘調査を実施した。また、遺跡の北辺部を住宅・都市整備公団（現 独立行政法人都市再生機構）の住宅建設に伴い、センターが1994～1997年（平成6～9年）にかけて約25,500m²の発掘調査を実施している。また、府営住宅整備関連に伴う道路拡幅及び新設にかかる調査を2002年度（平成14年度）に約2,037m²、2003年度（平成15年度）に約1,076m²をセンターが発掘調査をしており、当該地周辺では既にこれまで52,200m²にも及ぶ発掘調査が実施されている。

これまでの府教委及びセンターの発掘調査によって以下のことが判明している。総持寺遺跡では弥生時代後期半の土器棺墓・周溝墓といった墓域が、段丘崖に接する尾根状地形の南先端部分に築かれる。土器棺墓が先行し、周溝墓に時期差はない想定されている。古墳時代になると古墳時代前期に尾根筋に竪穴住居を主体とする集落が営まれ、中期には尾根筋の段丘崖を望む付近に総持寺古墳群が展開する。43基中1基の円墳を除いて総て方墳であった。周辺からわずかに高い尾根上地形に沿って北に広がるものと推定され、規模は小さいものが1辺4～5m、大きい



位置図

もので1辺約15mほどである。主体部は削平されており、木棺直葬と想定されている。出土した埴輪のうち、形象埴輪の多くと円筒埴輪の一部が高槻市新池埴輪製作遺跡と分析されている。古墳時代後期にも竪穴住居主体の集落が東西の谷筋に営まれる。

古代になると7世紀前葉～中葉（飛鳥時代）にも同様の選地で古墳時代後期に引き続き竪穴住居が営まれる。7世紀中頃に大型の掘立柱建物跡を構成する一辺1mを超える方形の柱穴堀方が検出される。遺構のまとまりを把握できるとしているのは、7世紀中頃の柱穴より一回り小さい方形堀方の柱穴群で、31棟の掘立柱建物を復元し、8世紀後半から9世紀にかけて存続したものと考えられる、としている。（府教委報告書より）

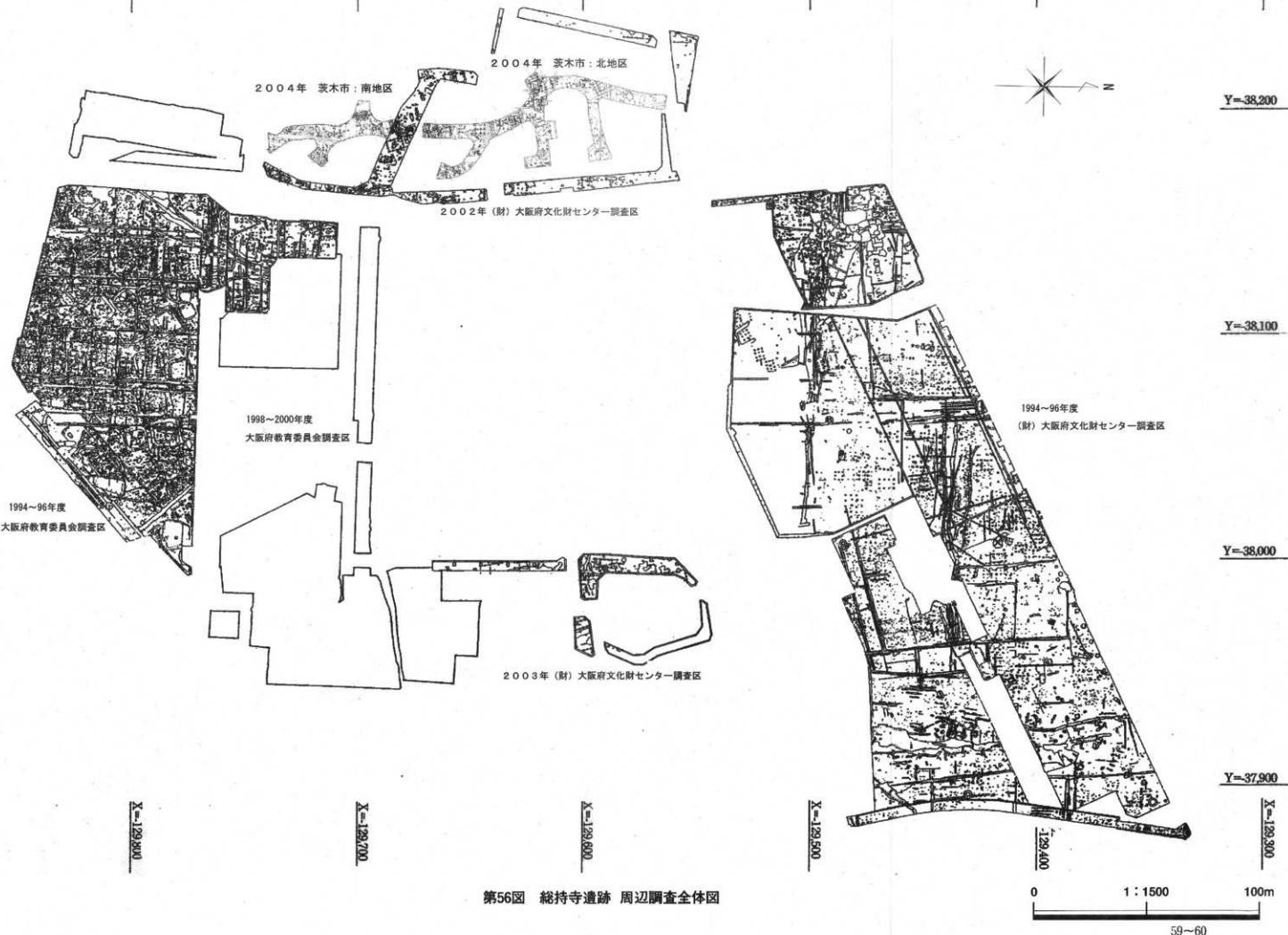
今回の調査区に隣接するセンター02-1調査区では弥生時代後期、7～10世紀、12世紀後葉～13世紀の遺構が検出されている。弥生時代後期の遺構は東西の溝（66）1条のみで、7世紀代の遺構は7世紀前葉～中葉頃と推定される竪穴住居7棟を調査区南端部で検出している。7～8世紀代の遺構は復元された13棟の掘立柱建物や5列の柱列を主として溝（25）落込み（410）等があり調査区南部で確認されている。10世紀代の遺構は調査区南部の小規模なピット群で、12世紀後葉～13世紀の遺構は柵や溝、柱穴等を調査区北部や北端部で検出したとされている。出土遺物は10箱程で弥生時代後期の広口壺・高杯・無頬壺等や古墳時代後期（6世紀）は遺構・出土遺物ではなく包含層から須恵器が出土している。7～8世紀代の遺物は調査区全域で普遍的に認められ出土遺物の大半を占めているとされる。ほかに古代後期～中世のものは縁軸陶器、黒色土器椀、土師器皿、瓦器椀、白磁碗等が出土している。また、10世紀中・後期の「て」字状口縁皿、12～13世紀頃の土師器皿、和泉型瓦器碗等が出土している。（センター報告書より）

調査概要

今回の調査は2002年度（平成14年度西部02-1）にセンターが実施した道路調査部分に囲まれた区域内の開発に先立ち計画道路及び防火水槽部分の発掘調査を実施した。東西に延びる道路を境に調査区を北地区と南地区に分けている。調査の結果、検出された遺構は掘立柱建物21棟（推定復元）と柱列2条、竪穴住居5棟、溝9条、土塹11基、柱穴群である。また、出土遺物はコンテナ2箱分で須恵器・土師器が大半を占める。検出された遺構の主な時代は飛鳥時代（7世紀）から奈良時代（8世紀）の掘立柱建物や竪穴住居、溝、土塹といった集落遺構が中心で、時代を隔てて12世紀後葉～13世紀の中世遺構がある。

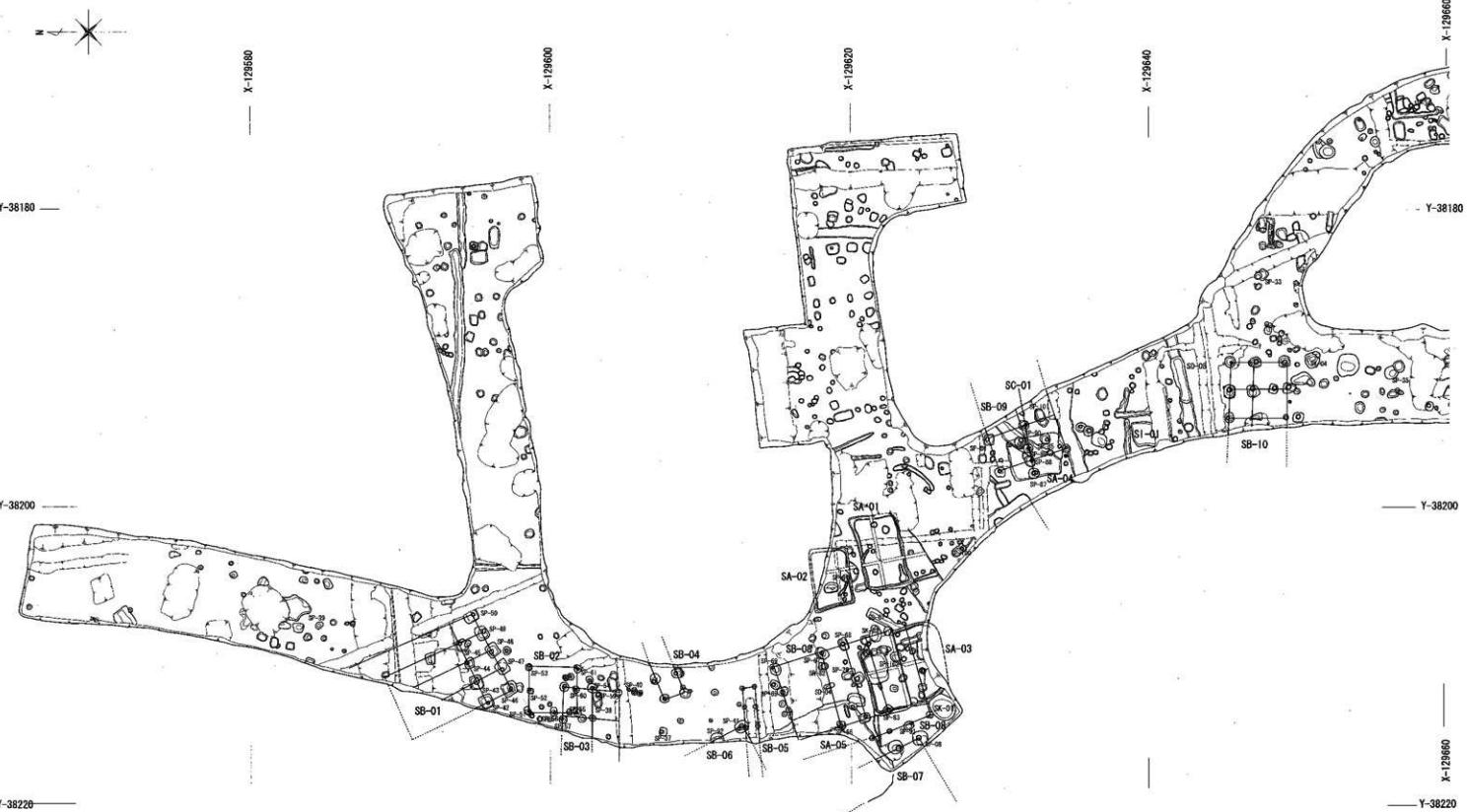
基本層序

上から表土10～40cm、黄色シルト5～15cm（遺物包含層）、暗褐色土10～15cm（遺物包含層）、地山（黄褐色砂礫混土）である。調査区の北端から南端まで南北に約180mの距離があるため、その基本層序は一様ではなく、北調査区においては北部から中央部にかけて遺物包含層は見られず、表土直下が地山面である。また、北調査区南部から南調査区中央部にかけて良好に遺物包含層が残存している。調査区は北から南へ向かって地形が緩やかに傾斜しており、標高は北調査区ではT.P.22.2～21.4mで、南調査区ではT.P.21.3～20.9mで遺構が検出される。全体では比高差1.3mを測る。



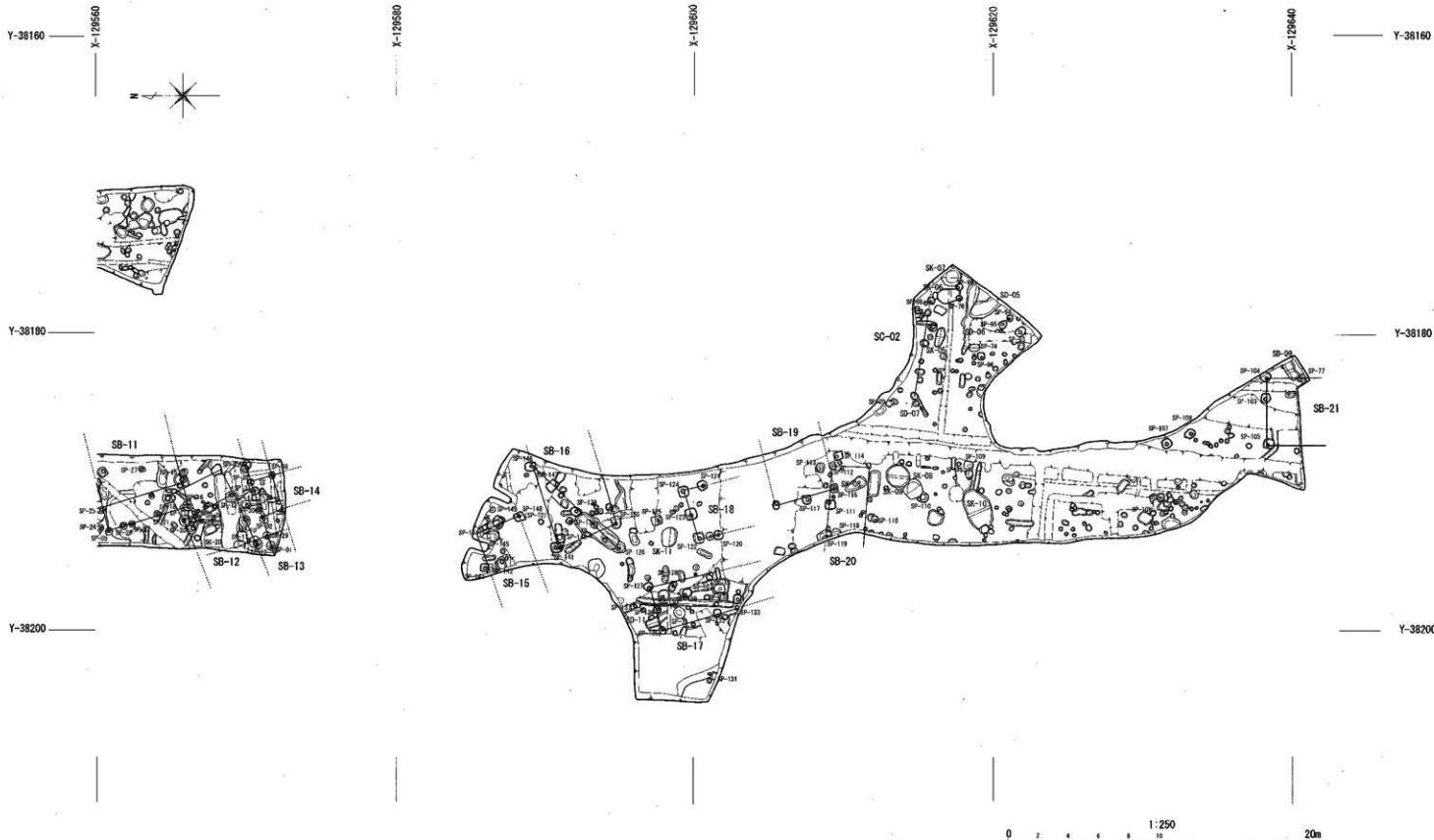
第56図 総持寺遺跡 周辺調査全体図

0 1:1500 100m
59~60



第57図 総持寺遺跡 調査区北地区全体図

0 1:250 20m

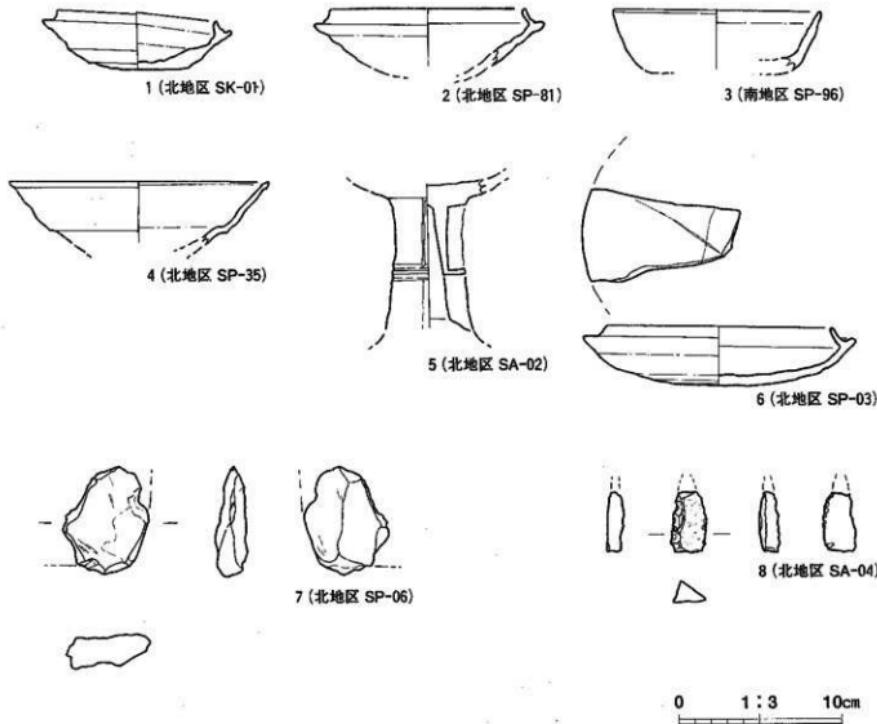


第58図 総持寺遺跡 南地区全体図

検出遺構（第57・58図）

遺構は前述のとおり、掘立柱建物や竪穴住居を主とした構成の集落跡が調査区全域に展開するが、北調査区の北端及び東側においては遺構数が少ない上に検出遺構も浅いものが多数を占める。遺物包含層の堆積もなく、表上直下が地山面であることから推察すると、削平された可能性が高い。

竪穴住居は北調査区中央部のみで検出されており、5棟を数えいずれも平面形は隅丸方形・長方形を呈する。竪穴住居（SA）1及び2が長方形で東西方向に長い。長軸方向はSA 1～3がN76° Eで主軸と同じにする。SA 4はN 9° W、SA 5はN62° Eである。規模はSA 1が



第59図 総持寺遺跡 出土遺物

4.0×2.7m、S A 2 が 5.1×3.1m、S A 3 が 5.3×5.0~m、S A 4 が 3.6×2.8m、S A 5 が 6.0~×5.8~m を測り、S A 5 がやや大型である。重複関係はいずれの竪穴住居も建物跡 (S B) を構成する柱穴に切られることから建物に先行するようである。検出状況は表上直下のため掘込面は不明である。埋土は自然堆積で概ね 1 層~2 層の堆積である。A 層は暗褐色土主体、B 層は暗褐色土に黄褐色シルトを含む。床面はほぼ平坦でシルト上面を直接床面とし床構築上は認められない。S A 3 のみ 4 本の支柱穴が認められる。

出土遺物はいずれの竪穴住居からも甕や壺等の須恵器や土師器が出土しているが、削平され浅いためか遺物は少ない。時期のわかるものとしては S A 2 から須恵器高环脚部 (第59図) や S A 3 の須恵器坏身・蓋があり、7世紀前葉 (T K209) 頃と思われる。また、S A 3 の南西隅に隣接して土塙 (S K 1) があり、長軸 1.8m・短軸 1.6m の楕円形を呈し、深さは 0.4m で埋土は 2 層に大別できる。A 層は黒褐色土に灰黄褐色シルトを多量に含む。B 層は暗褐色土に黄褐色シルトを含む。出土遺物は須恵器坏・蓋・身 (第59図)、埴輪片等があり、時期は竪穴住居と同時期と考えられる。

建物跡 (S B) は復元できるもので 21 棟程度を数えるが、建物の平面形・主軸方向や柱間・柱の掘方形状及び大きさ、埋土等から概ね最低 8 つの建物群に分類でき、時期・時間的な差が考えられる。

中でも一番古いと考えられるのは S B 11 である。平面形態は 3 間 × 2 間で主軸は N70° E である。建物規模は 5.5×3.1m 程で柱の掘方は長軸 0.5m、短軸 0.4m で柱痕跡は直径 0.2m、柱の深さは 0.35~0.5m を測る。この建物を構成する柱穴 (S P 5) からは須恵器坏蓋が出土しており、6 世紀前葉頃のものと見られる。また、S B 11 と主軸を同じくする S B 9 も同時期のものと考えられ、2 間 × 1 間~で平面規模は 4.7×2.3~m、堀方長軸 0.7m、短軸 0.6m、柱痕跡は直径 0.2m、柱の深さは 0.35~0.5m を測る。

次に古いと考えられるのは S B 13・14・17 である。また、S B 8 も主軸 N73° E でこれらに後続する建物と思われる。この 4 つの建物に共通することは主軸が N72° ~73° E で S B 13 以外、南北方向に長い建物であることである。21 棟の建物のうち殆どが東西に長い建物と考えられることが大きな特徴である。

また、S B 8・14 は総柱建物であることから倉庫としての機能があったと思われる。S B 8 は 3 間 × 5 間の南北方向に長い総柱建物で西面と南面に庇が付く。建物規模は 5.1~8.15m で柱間寸法は桁行 1.63m、梁行 1.72m (一部中央部の梁行は 2 間で 2.55m の柱間) を測る。掘方形状は長方形を呈し、およそ長軸 0.8m、短軸 0.7m、柱穴の深さは 0.14~0.5m を測る。底面の標高はほぼ同じで柱痕跡は円形を呈し、直径 0.25m を測る。庇部分の柱穴は西面の全長が 6.5m、柱間は 2.17m、南面の全長は 4.2m で柱間は 1.4m を測り、柱穴の大きさが 0.3~0.5m 前後と主屋部分の柱より一回り小さい。埋土は柱痕跡が褐色土及び暗褐色土で掘方埋土は橙色シルトに褐色土を含む。出土遺物は土師器片が出土したもののが古代であるとしか判別できないが、重複関係から S A 3 より新しいことが窺え、7 世紀中葉頃の建物跡と推定される。

S B13は1間×3間で規模は?×6mで掘方は長軸0.65m、短軸0.5m程で柱痕跡は直径0.2m、柱の深さは0.4~0.5mを測る。

S P 1~3から須恵器壺蓋や身、土師器が出土し6世紀末~7世紀前葉頃のものとみられる。

S B14も南北に長い総柱建物と思われ、2間×1間~で、規模は3.8m~×1.5m~を測る。

S B17も南北に長く2間×3間~で規模は3×5.3m~で主軸方向はN17°W(N73°E)である。

また、S B1・12とS A5が奇しくも主軸が同じでN62°Eを示す。

さらにS B1とS A5は15m程の距離で、倉庫と竪穴住居の同時性を窺わせる。

S B1は2間~×4間の東西方向に長い総柱建物で規模は3.6~×5.6m、柱間は桁行1.4m、梁行1.8mを測る。掘方は桁行方向が0.9~1m、梁行方向が0.8~0.9mを測る。柱穴の深さは中央の桁行に並ぶ柱は0.18~0.22mに対して、側の桁行の深さは0.34~0.46mを測る。柱痕跡は直径0.23~0.3mを測り、埋土は柱痕跡が黒褐色土に明黄褐色シルトを含み、掘方埋土はにぶい黄褐色土に黄褐色シルトや灰白色粘土ブロック、灰黄褐色土を含む。出土遺物はない。

S B12は2間×2間~で規模は3.7×3.7m~、掘方は正方形を呈し共に0.7m程で柱痕跡は直径0.3m、柱穴の深さ0.4~0.55mを測る。

S P4からは須恵器壺、土師器が出土している。S A1~3とS B18・19も軸方向が同じで、共に2間×1間~でS B18を構成するS P121・123・124から土師器が出土している。

他に古代~古代末の建物と思われるグループは主軸方向がN67°Eを示すS B4・15・16で、S B15を構成するS P144から土師器が出土している。

S B2・10(総柱建物)・21は主軸が真北方向を示すグループで遺物の出土はない。

S B3・20は主軸がN85°Wを示し、S B3を構成するS P54から土師器が出土している。ほかに柱列(S C)1や掘方が1m前後と大きく、主軸がN30°Wを示すS B6・7が見受けられる。

中世に属するものとしては柱の形状が円形を呈し、概ね直径0.3m前後の柱穴で構成されるS B05やS C2が挙げられる。

出土遺物

1~6はすべて須恵器である。1はSK1出土の壺身で器高2.9~3.6m、口径9.4cm、最大径11.5cmを測る。

2も壺身でSA2内のS P81から出土し、器高(復元)3.5cm、口径11.9cm、最大径14cmを測る。

3はS P96出土の壺身で器高3.7cm、口径(復元)12.7cmを測る。

4はS P35出土のハソウ口縁である。残存高3.8cm~、口径(復元)16cmを測る。

5はSA2アゼから出土した高壺の脚部で2段2対の透かしを施すものであるが、上段は内面まで貫通していない。残存高は8.9~cmを測る。

6はSB13を構成するS P3出土の壺身で底部外面は回転ヘラケズリを施し、「X」のヘラ描きがされる。器高は3.6cm、口径13.8cm、最大径16.7cmを測る。

7はS P 6出土の泥岩製の砥石で、8はS A 4出土の石鎌である。1・2・4・5は概ね7世紀前葉～中葉頃、6は6世紀後葉～6世紀末頃、3は7世紀後半以降と思われる。

まとめ

S B11を構成するS P5、及びS B13を構成するS P2・3から明らかに6世紀代の須恵器が出土しており、古墳時代後期に属する。これまでの調査ではこの時期の集落構成を示すものは数棟の堅穴住居とされていたが、掘立柱建物も新たにその構成に加わる可能性がある。

しかし、現段階では調査の類例を待って慎重に判断をする必要があろう。また、調査区が独立することによる掘立柱建物の平面形や建物に伴う、時期の判る遺物の出土が少ないとからも復元された掘立柱建物群は今後も検討を重ねていきたい。

なお、センター調査区及び府教委で検出された堅穴住居とSA1～3の時期に関しては7世紀前葉～中葉で一致している。さらに、時期は不明であるがSA5とSB1(縦柱建物)、SA3とSB8(大型庭付建物)といった堅穴住居と掘立柱建物の関係にも留意したい。

私見ではあるが、6世紀代から堅穴住居以外にも掘立柱建物が存在し、7世紀段階では、むしろ掘立柱建物（住居や倉庫）が主流であって、堅穴住居は何らかの理由で7世紀中葉まで残ったものと考えたい。500m程北に位置する総持寺北遺跡でも9世紀後半～10世紀前半と考えられている建物群が約70棟ほど検出されるなど、総持寺遺跡から北へ集落が移動されていったことが指摘されている。遺跡の規模・存続期間・建物等の多さや遺跡総面積に対する既往調査面積の割合等、これまでの調査結果を考え合わせると、古墳時代から古代にかけて、この地域一帯ではかなり有力な勢力を誇った集団が存在していたことが容易に想像できる。その集団の有力候補は現在のところ地名や文献に名のある中臣系の太田連が考えられるが、今後の調査および成果に期待したい。

参考文献

- 1995 「『總持寺遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会
 1997 「『　　』[II]　　〃
 1998 「『總持寺遺跡』『センター調査報告書 第30集』 現(財)大阪府文化財センター
 2004 「『　　』[「　　」第117集] 〃



調査区全景 北地区（南から）



調査区全景 北地区（北から）